ツングース諸語における基礎語彙 A（名詞編）

風間伸次郎*

[はじめに]

ツングース諸語の比較研究に関しては、Cincius i al. (1975, 1977) という大きな比較事典（以下では C.と略す）があるが、これはツングース諸語それぞれにおける同語源の語を、その意味に関わらず同じ項目のもとに整理したものである。しかしこれでは諸語間で、同じ意味に対して違う語源からの語がその位置を占めている場合にはその状況がどのようであるのか把握できない。そこでまず基礎語彙の項目ごとにツングース諸語の語形を整理することを目指したのがこの論文である。表題における「基礎語彙 A」とは『アジア・アフリカ言語調査票 上・下』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1966, 1967）の第1表（A）のことである。本稿では A 項目 200 のうち前半の、名詞（代名詞を含む）126 語をまず扱った。ひきつづき別誌に後半の動詞・形容詞編を発表し、そこに併せて全体に関する考察を述べる予定である。なお（26）[71]「刀」だけは「ナイフ」と意味を置き換えた。

Ikegami (1974) によれば、ツングース諸語は主に音韻対応にもとづいて以下のような 4 つのグループに分けられる（なお本稿ではそれぞれの言語に以下の（ ）内のような略号を用いてゆくことにする）。

I 群	II 群	III 群	IV 群
エウェン語 (Ew)	ウデヘ語 (U)	ナーナイ語 (Na)	満洲語 (Ma)
エウェンキー語 (Ek)	オロチ語 (Oc)	ウルチャ語 (Ul)	女真語 (J)
ソロン語 (S)		ウイルタ語 (Ut)	
ネギダル語 (N)			

本稿ではさらにシベ語 (Si) を満洲語とは別ものとして扱い、各語彙の表においては IV 群の言語 (Ma) と (J) と共に、縦に並べて整理した。

ヘジェン語は風間 (1996a) で音韻対応の面から II 群に分類することを提案したが、その是非は今後の検討を要する。そこで本稿ではとりあえず II 群の (U) 及び (Oc) と縦

* 東京外國語大學

に並べて整理し、それらとの異同に注目することにした。

個人差や方言差が入り込むのを避けるために、個々の言語の語形をあげる際には、なるべくどの言語も一人のインフォーマントの持つ語彙体系に依るように努めた。(Ew), (S), (Ek1), (Ek2), (U), (Oc), (Na) の語形は筆者自身の調査で採集したものである。なお (Ek1) は中国内蒙古自治区のエウェンキー語チンバルグ旗のハムニンガン方言、(Ek2) は同じく中国内蒙古自治区のエウェンキー語オルグヤ方言である。

(Ew) は 1996 年夏、マガダンにて、Zinaida Iwanovna Babceva 氏 (女性、1935 年 Talaja 村生まれ) より調査。(S), (Ek1), (Ek2) は 1988 年夏、中国内蒙古自治区南屯市にて、それぞれ (S) はカミラ氏 (Kamila、女性、1960 年生まれ) より、(Ek1) はウルドゥニ氏 (ərdəni、男性、1923 年チンバルグ旗生まれ) より、(Ek2) はマニ氏 (Mani、女性、当時約 40 歳) より調査した。なおこの調査に際しては津曲敏郎先生 (小樽商科大学) といっしょに調査させていただき、いろいろと御教示を頂いた。すでに (Ek1) と (Ek2) の採集された語彙については、Tsumagari (1992) に発表されている。また (Ek2) のもつ特徴について津曲 (1997) がある。

(U) は 1989 年 12 月ハバロフスクにて、Valentina Tunsjanovna Kjalundzjuga 氏 (女性、1937 年グヴァシュギ村生まれ) より、(Oc) は 1995 年夏、ウスチ・オロチスカヤ村にて、Gregorij Igorevich Akunka 氏 (男性、1921 年 Xutu daatani 村生まれ) より調査した。(Oc) に関しては風間 (1996b) も参照されたい。(Na) は 1989 年 12 月ハバロフスクにて、Viktor Mixajlovich Gejker 氏 (男性、1941 年ジャリ (トロイツコエ) 村生まれ) より調査した。

他方 (Hz), (Ma), (Si), (Ma), (J) は方法論上多少問題はあるかもしれないが、文献によることにした。

(Hz) は安 (1986) 巻末の語彙から、(Ut) は池上 (1997) 巻末の基礎単語日本語索引によった。(Si) は山本 (1969) の日本語索引から調べたが、そこには同源の (Ma) の語形があがっているので (Ma) はこれによった。(J) は Kiyose (1977) の p. 96 以下にある "1. The Berlin National Library Text" 及び p. 146 以下の "2. Supplement from the Tooyoo Bunko Text" の語彙によった。

表記について、まず全体にわたって、IPA の ɲ は ň と書くことにした。これは ň の音声的な、また音変化の上での č [ʧ]、ǰ [ʤ] との平行性を意識したからである。また (Na) や (Ut) などでは i の前で n と ň は対立しないので、[ɲi] を ni と書いてなんら差し支えないが、一方多くの言語で ti と či、di と ǰi は対立し、(Ul) では ni と ňi も対立するので、これらを統一して取り扱うためにも [ɲi] は ňi と書くことにした。一方 si は s の口蓋化の有無によらず si と書いたが、(S), (J) では si と ši の対立があるものとみてこれを残した。

(Ew), (Ek) などでの γ は g とした。Shneider (1936) のいう (U) のいわゆる中断母音、気息母音はそれぞれV (') V、V (h) V (V は母音) とした。(Ew) と (U) などで、二つもしくは三つの母音連続の下にアンダーラインのあるものは、母音の融合 (相互同化) の起こることを示す。(Ew) で Novikova (1980) がキリル文字の硬音符号で示している母音については、これを ɯ で表記した。

(Hz) では表記を他の言語の表記に合わせ適宜簡略化した。ここでは特に y と書かれていたものを ju にしたことを特記しておく。また (Ek1) 及び (Hz)、(Na) での c の音価は [ts]、z は [dz] である。

(J) については津曲 (1989) を参考に h を x に、e を ə に変えた。また ng を ŋ に変えた。(Si) では c を č に、j を ǰ に、N を n に変え、' を省略した。

(Ma) については、津曲 (1992)、池上 (1987) を参考にし、通例行われるメレンドルフ (Möllendorff) 式転写法の e を ə に、c を č に、j を ǰ に、y を j に、ngg を ŋ に、h を x に、それぞれ変えたが、ŭ はそのままにした。

以上に記してきたような方法で、まず諸言語の語形をあげたが、その下に各語形についてのコメントを附した。主に C. によって語源の異なる個々の語形がどのように分布しているかを確認したものである。なお C. は (Hz), (Si) は扱っていない、本稿で「C. によれば全ツングースにあり、」とある場合にはこの二言語を除いたもの ((Ek), (S), (Ew), (N), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)) を指していると考えて頂きたい。

問題のあるものについては、できるだけさらに一次資料に戻って確認するように努めたつもりである。ただ C. 以外の文献、すなわちツングース諸語、さらにはアルタイ諸言語の比較に関する先行研究を十分参照する余裕がなかった。したがってこれは現段階での整理であって、今後のフィールドでの調査の目安とする目的もあって暫定的に作成したものであることをことわっておく。

[資料編]

(1) [1]あたま (頭) (head)

		(Hz) dili		(J) uju
(Ew) dil	(Ek1) dili	(U) dili	(Na) ǰili	(Si) uǰu
(S) dil	(Ek2) dil	(Oc) dili	(Ut) ǰili	(Ma) uǰu

C. によれば Ⅳ 群の uju は Ⅰ Ⅱ Ⅲ 群の「脳」((Ek) irgə, (Na) iigəなど) と対応し、その一方で (Ma) のみに fəxi「脳」がある (そこではモンゴル文語 (以下では (lit.Mo) と略す) hekin「頭」が参考にあげられている)。(Ma) ǰiliには「鹿などの角の根もと」

の意がある (羽田 1937).

(2) [2]かみのけ (髪の毛) (hair)

		(Hz) juxtə		(J) funirxəi (gen.?)
(Ew) ňurit	(Ek1) nuuriktə	(U) ňuktə	(Na) nuktə	(Si) feňixə
(S) nuuttə	(Ek2) ňuriktə	(Oc) nuktə	(Ut) ňiruktə	(Ma) fuňijəxə

(Oc) の語形について Avrorin i Levedeva (1978) は ňuktə としているが、筆者調査でも (Oc) の他のインフォーマントからは ňuktə の形が得られた. 池上 (1994) によれば (Ut) の北方言では nuriktə である. C.によれば I II III 群と同源の形は IV 群に見いだされず、その逆もまた然りである. IV 群の語形の来源は不明である. C.は (lit.Mo) hünegen「狐」を参考にあげている.

(3) [5]め (目) (eye)

		(Hz) izala		(J) jaši
(Ew) jaasuul	(Ek1) iisal	(U) ja(h)a	(Na) nasal	(Si) jasə
(S) iisal	(Ek2) eexa	(Oc) isa	(Ut) isal	(Ma) jasa

II 群のうちでも (Oc) isa には他の群の l に対応する隠れた g がある (風間 1996b). 池上 (1989) によれば (Ma) には他のツングースの多くに共通する名詞の複数接尾辞 -l がないが、この「目」でも IV 群の諸形の語末には l がない.

(4) [7]みみ (耳) (ear)

		(Hz) šan		(J) šaa
(Ew) korit	(Ek1) siin	(U) ku(')ai	(Na) sian	(Si) šan
(S) šeen	(Ek2) seen	(Oc) siæ	(Ut) seen	(Ma) šan

C. によれば (Ew) と (U) の形と対応する語は (Ek), (Oc) と III 群にあり、いずれも korokto「耳殻」である. したがって (N), (S) は除くが、いちおう I II III 群に分布することになる. ただし r があるので (Oc) の korokto はおそらく III 群からの借用と考えなければならないだろう.

C. によれば、他方 (Ew) には hⁱæækaan「耳飾り」、(U) には sasa「頬」(<seečaan、(N) xeečaan「頬」) などがあり、(Ew) と (U) にもかつては他の諸語と同語源の「耳」の語形があった可能性が示唆されている.

(5) [8]はな (鼻) (nose)

		(Hz) oforo		(J) soŋi
(Ew) oŋat	(Ek1) oŋokto	(U) ŋiuə	(Na) oporo	(Si) ofərə
(S) ňeenči	(Ek2) oŋokto	(Oc) ŋikso	(Ut) xuriga	(Ma) oforo

C. には、上記の (Ew), (Ek1 2) と同源の語として、(Ek), (Oc), (Na), (Ul), (Ma) さらに (Ul) からの借用として (N) にいずれも「舟の先端」の意の語 ((Ek) oŋo、(Na) xoŋkoなど) があがっている。そのうち (Oc) xoŋko は語頭に x があることからみてやはり III 群の言語からの借用であろう。

上記の II 群の語については (Ew) のアルマン方言の ňees、(Ul) waksa、(Ut) naksa (意味はいずれも「鼻」) を比較している。池上 (1997) では naaksa は「鼻水、膿」の意となっている。(S) では (Ek), (Oc) の -ks- が -č- と対応するので、上記の (S) ňeenči もこれらと同源と考えられるが、するとňeenči の n はなぜ生じたのだろうか。

C. によれば上記の (Na) と (Si), (Ma) の語はこれらの言語にしかなく、その来源は不明である。(Na) でもアムール河下流の方言のインフォーマントは「鼻」を ŋoaksa と言うので、(Na) の oporo は (Ma) から入ったものではないか。

C. は上記の (Ut) と同源の語として (Na) xoorian「眉間」、(Ul) xoran「面 (つら、軽卑語), 眉間」、(Oc) xoran「つら、((Ul) からの借用)」をあげている。

C. によれば、上記の (J) の語は (Ut) を除く II III 群で「鼻輪」の意の語に残っているようだ (Na) sanǰaxa)。(Ma) soŋixa は「鼻柱、牛などの鼻にかける曲がり木」などの意であるという (羽田1937)。

(6) [9]くち (口) (mouth)

		(Hz) amŋə		(J) amga
(Ew) amŋɯ	(Ek1) amŋa	(U) aŋma	(Na) aŋma	(Si) aŋə
(S) amma	(Ek2) amŋa	(Oc) amma	(Ut) aŋma	(Ma) aŋa

(7) [13]は (歯) (tooth, teeth)

		(Hz) ixtələ		(J) wəixə
(Ew) iit	(Ek1) iiktə	(U) iktə	(Na) xuktə	(Si) viixə
(S) iittə	(Ek2) iiktə	(Oc) iktə	(Ut) kərəktə	(Ma) wəixə

池上 (1997) によれば (Ut) の iktə は「雄、犬の犬歯。雄、トドの歯」である。また

C. によれば (Ul) 及び (Ut) の北方言の「歯」も iktə であるが、(Na) の xuktə と比べると語頭の x がなく、u は i になっており、対応からいえば I II 群の語であるべき形をしている。I 群の i の母音がなぜ長いのかも不明である。(Hz) の語末の -lə が何であるかも不明だが、(10) 足、(28) 着物の (Hz) にも同様の -lə が認められる。(Ut) kərəktəの来源は不明である。

(8) [30]て (手) (hand)

		(Hz) nala		(J) gala
(Ew) ŋal	(Ek1) naala	(U) ŋaala	(Na) ŋaala	(Si) Gala
(S) naala	(Ek2) ŋaala	(Oc) ŋaala	(Ut) ŋaala	(Ma) gala

(9) [31]ゆび (指) (finger)

		(Hz) čumkən		(J) —
(Ew) xərɯgɯn	(Ek1) urugun	(U) uňaa	(Na) čumčuən	(Si) šiumuxun
(S) unuxun	(Ek2) uňakačan	(Oc) čomočko	(Ut) kotoo	(Ma) simxun

上記 (Ew) の語は Novikova (1980) によれば「親指」である。これと同源の語は C. によれば (J) を除く全ツングースにあってやはり全て「親指」の意である。上記では (Ek1) とさらにおそらく (S) が対応する。

(Ek2) と (U) にみられる語形は (J) と (Ma) を除く全ツングースにあって、まず I 群では (S) を除き「人差し指」であり、派生関係にある語に「匙」や「指輪」の意味がある。(S) では同じ語に「指 (一般)、匙」の意があり、「指輪」の意の派生語がある。II 群では「指 (一般)」で、やはり「匙」や「指輪」の意の派生語がある。III群では「指」の意の語がなく、「匙」の意で、「指輪」の意の派生語がある。

上記 (Hz), (Oc), (Si), (Ma) にみられる語と同源の語は、C. によれば I II 群と (Ut) を除く III 群、及び (Ma) にあり、I II 群では「小指」の意である ((Oc) には「指 (一般)」の意もある)。

(Ut) kotoo と同源の語は C. によれば (Na) と (Ul) にあり、「指をはじくこと」、「指をパチッと鳴らすこと」などの意である。

このように「指 (一般)」を指す語はバラバラで、言語が違うと「親指」だったり「人差し指」や「小指」であったりして、意味の拡大や縮小が起きていることがわかる。

参考までにいくつかの言語の個々の指の名称を整理してみると以下のようである ((Ew) は Cincius i Rishes (1952) より、(Ek) は Boldyrev (1994) より、(Na) は Onenko (1986) より、(Ut) は池上 (1997) より、(U) はクラースヌイ・ヤール村にお

ける筆者調査 (インフォーマントはGeonka Chixuvich Susan氏、1915年、Xabgou村生まれ) による).

「指」	「親指」	「人差し指」
(Ew) xair/ŋaal	(Ew) xurəgən	(Ew) uňikaan
(Ek) umuukəəčəən	(Ek) umuukəəčəən/əŋki	(Ek) apkal/uňakaačaan
(U) uňaa	(U) xoo	(U) siuə
(Na) cumcuən	(Na) puuruən	(Na) siru cumcuən
(Ut) kotoo	(Ut) pərə	(Ut) xuňigə

「中指」	「薬指」	「小指」
(Ew) dulagan	(Ew) ač gərbələə /čimčəənňi geeno	(Ew) čimčəən
(Ek) dulug/dulugun	(Ek) gərbiijə aačin umuukəəčəən	(EK)uňakaačaan /ňikaakii
(U) dulimtə	(U) čimca(')a agaňi	(U) čimca(')a
(Na) tokon cumcuən	(Na) gaikoan əikəňi	(Na) gaikoan
(Ut) taldaawu	(Ut) gajau	(Ut) čimutəə

ちなみに人差し指の (Ek) apkal は「長男」の意. 中指の諸形は「真ん中 (の指)」の意を持ち、薬指には「名無し指」((Ek)),「小指の兄、小指の姉」((U), (Na)) という意味的構成になっているものがみられる.

(10) [33]あし (足) (leg, foot)

		(Hz) bəgdələ		(J) budixə
(Ew) bəduul	(Ek1) bəgdiir	(U) bəgdi	(Na) bəgǰi	(Si) betəxə/bətəxə
(S) bəldiir	(Ek2) xalgan	(Oc) bəgdi	(Ut) bəgǰi	(Ma) bətxə

C. によれば、(Ek2) と同源の語は、(Ew), (N), (Ul), (Uk), (Na) で「くるぶしから先の足、足の裏」である (Avrorin i Levedeva 1978 によれば (Oc) も). (S) ではその他に「手のひら、足跡」の意があり、(Ma) では「手のひら」である. (Ek) でもやはり方言によっては「くるぶしから先の足、手のひら、蹄」の意があるという. (U) では「熊の手、熊の足跡」であり、風間 (1991 p. 84) によれば、やはり (Na) にも「熊の足跡」の意味がある. これらはタブーにより本来の「足跡」を示す語が使えないために

用いられる.

(Ew) の語末の 1 は前述の (Hz) 語末の -lə と同源か.

(11) [38]ひふ (皮膚) (skin)

		(Hz) ərxə		(J) sugu
(Ew) ərtɯ/nanrɯ	(Ek1) nanda	(U) ňi(h)a	(Na) xərəktə	(Si) soqə
(S) nanda	(Ek2) illə	(Oc) nasa	(Ut) xərktə	(Ma) sukū

(Ek2) の illə は < *ilsə < *ulsə で、普通「肉」の意味であるから、取り間違いかもしれない.

インフォーマントによれば (Ew) の ərtɯ は「人の皮」、nanrɯ は「獣の皮」である. C. をみてもこの nanrɯ と同源の語は「獣皮」の意で Ⅳ 群を除く全ツングースにあがっている.

一方 Ⅲ 群及び (Hz) にもみられる (Ew) の ərtɯ と同源の語は (N), (Oc), (Ul) で「人の皮」、(Ew), (Ut) では「人、鳥の皮」、(Ek) で「樹皮」の意でそれぞれ音対応する形があがっている (C.).

Ⅳ 群の語形はこれらとは相補的に分布し、C. には (Ma), (J) のみの記載がある. 羽田 (1937) には (Ma) sukū の意味について「皮膚、皮革、果物の皮、など全て皮」とある.

(12) [42]け (毛) (hair)

		(Hz) juxtə		(J) funirxəi
(Ew) ňurit	(Ek1) nuuriktə	(U) ňuktə	(Na) nuktə	(Si) feňixə
(S) igatta	(Ek2) ——	(Oc) ——	(Ut) sinakta	(Ma) fuňijəxə

(Ut) sinakta と同源の語は C. によれば (J) 以外の全ツングースに見いだされ ((Ek) inŋakta など)、いずれも「獣の毛、鳥の羽毛」の意である. (U) には「人間の体毛」の意もあるようだ. これらの語の祖形は *sirŋakta と考えられる (この対応について詳しくは風間 1996b を参照されたい).

(13) [44]ち (血) (blood)

		(Hz) səxsə		(J) səgi
(Ew) xuŋəl	(Ek1) səəksə	(U) saki(h)a	(Na) səəksə	(Si) šiŋə
(S) səəči	(Ek2) səəxə	(Oc) səəksə	(Ut) səəksə	(Ma) šəŋi

(Ew) の語は他の諸語の形と対応しないが、C. によればこれと対応する語は唯一 (Ek) ナカンノフスキー方言に xuŋəl「獣の血を乾かした料理の名」があがっているのみである.

一方 (Ew) にも他と対応する xəəc「乾いた固まった血」がある.

なお多くの場合 -ksa/-ksə に終わる名詞は動詞語幹から派生されて「液体」の意味を含む. この場合 (Ek) に səəgii-「血が流れる」があがっている.

(14) [45]ほね (骨) (bone)

		(Hz) giamsə		(J) giraŋi
(Ew) ikurri	(Ek1) giramda	(U) giama	(Na) girmaksa	(Si) giraŋə
(S) giranda	(Ek2) giramna	(Oc) giamsa	(Ut) girapsa	(Ma) giraŋi

ここでも (Ew) の語形 ikurri のみが他と対応しないが、C. によればこれと対応する語は、(S), (Na) を除くⅠⅡⅢ群にみられ、主に「(魚などの) 背骨、脊髄」などの意味だが、(N) だけは「骨」一般も指すようだ.

一方他の諸言語と対応する語形は、(Ew) girumrur「墓、骸骨」、(N) gijamna「骸骨」と、これらの言語にも存在するが「骨」一般の意味を持たないようだ.

(15) [46]にく (肉) (flesh)

		(Hz) ulzə		(J) jali
(Ew) ulrur	(Ek1) uldə	(U) ulə	(Na) uliksə	(Si) jali
(S) uldə	(Ek2) ullə	(Oc) uktə	(Ut) ulisə	(Ma) jali

Ⅳ群の諸形についてC. は別項目をたて、(S) jali「肉」、(Ul) jali「熊の肉 (宗教的な古語)」を共にあげているが、これは (Ma) から借用したものではないだろうか. ⅠⅡⅢ群の語とⅣ群の語が対応する可能性も考えられるだろう.

(Na) uliksə の下線部は他との対応から考えると余分であり、後から加えられた要素だろうか (前項 (14) (Na) girmaksa も同様).

(16) [47]からだ (体) (body)

		(Hz) bəjə		(J) ——
(Ew) ——	(Ek1) bəjən	(U) bəjə	(Na) bəjə	(Si) bəi
(S) bəjə	(Ek2) bəjə	(Oc) bəjə	(Ut) bəjə	(Ma) bəjə

調査の不手際で採れなかっかが、(Ew) に bəj「体」があり、普通によく使われる。C. によればどの言語でも広くいろいろな概念を指し、「人間、男、雄、夫、体、自分、人格、顔、幹、人生」などの意味がある。

(17) [48]びょうき (病気) (diseases, illness, sickness)

		(Hz) unkụ		(J) ——
(Ew) butən	(Ek1) ənuku	(U) uňi/unuu/suulə-	(Na) ənuu	(Si) ňiməku/ňimuku
(S) ənux	(Ek2) ənuk	(Oc) ənuu	(Ut) ənuu	(Ma) ňiməku

(Ew) butən は Petrova (1980) にも「病気」としてはっきり記載されているが、C. にない。もっとも近いと思われるのは「死ぬ」の動詞語幹からの派生と考え、その項目に記載したと思われる (Ew), (Ek) の butəək「病弱な」である。

(U) uňi と同源の語は C. によれば (Ew), (Ek) で「侮辱」の意、(N), (Ul), (Na) のアムール河沿いの言語では「客のためにと振る舞われた食事を食べなかった時になる病気」の意味である。筆者も (Na) の村で何人かのインフォーマントからこれについての話を聞いた。この迷信 (?) はまだ実際に信じられている。(U) の unuu は別のインフォーマントによれば unugu であったが、C. も unugu の形で (U) uňi と同じ項目にあげている。(Hz) の語もこれと同源だろう。なお池上 (1997) は (Ut) の同様の病気 xuni- について「(こどもなどが)ほしいものが得られなく腹が痛くなる」の意であるとしている。

(U) suulə- は「病む」という意の動詞語幹で、C. によれば (U) のみにある。

C. によれば、(S), (Ek1 2), (Na), (Ut) の語は (Na) でいえば、ənusi-「痛む、病む」、ənənə「イタタ!」と同源で広く (J) 以外の全ツングースにある。

Ⅳ群の語は C. では (Ma) にのみあるとされ、ňimə-mbi「病む」からの派生とされている。

(18) [50]くすり (薬) (medicine)

		(Hz) oxto		(J) ——
(Ew) bəg	(Ek1) əəm	(U) okto	(Na) okto	(Si) oqətə
(S) əəŋ	(Ek2) bəgə	(Oc) bəəki	(Ut) okto	(Ma) okto

C. によれば (Ew) bəg, (Ek2) bəgə と同源の語は、(Ek) bəgə「皮革の加工のために塗る獣の肝臓や脳から採った酵素、薬、軟膏」、(N)「薬」、(Oc) bəədə- (< bəgdə-)「治す」であり、奇妙な分布をしている。また C. はそこに古代チュルク語の buɣa

「薬による処方」を参考にあげている。(S), (Ek1) の語形は (lit.Mo) em「薬」からの借用である (津曲 1992)。(Oc) bəəki は Avrorin i Levedeva (1978) にも記録されているが、C. にない。上述の (Oc) bəədə- (< bəgdə-)「治す」からの派生によるものか。

池上 (1987) では、松花江最下流部よりアムール河口まで、さらに隣接のシホタアリン地方に「アムール流域」の名を与え、この地域の諸言語が満洲語・中国語からの多数の借用語をもち、特に東シベリアのツングースとの対比において、一つの言語圏をなしていることを指摘しているが、上記の okto 及びそれと同源の語の分布はこの言語圏に符合しているとみてよいだろう。ここでは満洲語からアムール下流へ広まったものと考えたい。

以下でも「アムール下流域」型の分布を示す語がいくつも現れるが、その際、(Ut) や (S) もそこに含まれてくる場合がある。これはサンタン交易のルートがアムール河口からさらにサハリンへ伸びていたこと、また (S) は、清朝によって今の居住地域に移されたように清朝の影響力を受けていたことから、理解することができる。

(19) [53]しお (塩) (salt)

		(Hz) dabsun		(J) dabsun
(Ew) tak	(Ek1) dawsun	(U) sa(')i	(Na) daoson	(Si) dafəsun
(S) doosun	(Ek2) turukə	(Oc) daksu	(Ut) dausu	(Ma) dabsun

(Ew) tak について C. は (Ew) のみにあるものとして独立に一項目をたてている。これは一見 (Oc) の語形に似るが、(Ew) では一般に *-ks->-s- の変化がおきているので (Oc) の語形からは導き出せない。

(Ek) turukə、(U) sa(')i も C. はそれぞれ (Ek) のみ、及び (U) のみで一項目をたてており、その出自は不明である。

その他の (S), (Ek1) などの語形はモンゴル語より借用したもの ((lit.Mo) dabusu(n)) である。(Oc) と (N) で daksu と k が現れているのが注目される。

(20) [54]あぶら (油) (oil)

		(Hz) imərsə		(J) imərji
(Ew) imruu	(Ek1) imuksə	(U) imo	(Na) simuksə	(Si) ňimərjə
(S) imičči	(Ek2) imuurən	(Oc) umuksə	(Ut) ilda/nəmuu	(Ma) ňimərji

池上 (1997) によれば、ilda は「あざらしや魚の油」、nəmuu は「あざらしや熊の固

形の油」であるという。C. では、ilda は (Ut) のみの記載であり、一方 nəmuu と同源の語は (Ek), (N), (U), (Ul), (Ut) にあるとしており、意味はいずれも「熊や海獣の脂肪」である。

(Ut) 以外の語形は基本的に対応すると考えられる。Petrova (1980) によれば、(Ew) にはimruun、imsuuがあり、ともに「油、脂肪」の意である。したがってimruunが (Ek2) imuurən と対応し、imsuuが (Ek1) imuksə と対応する (*-ks->-s- の変化による) ものであろう。

前述の (13)「血」(U) saki(h)aもそうだが、他の諸語の女性母音からなる語が (U) だけ男性母音の語になっている。筆者の聞いた印象では II 群の (U) と (Oc) では他の言語に比べ ə と a が近い音に聞こえる。

(J) にない (Si) と (Ma) の語頭の ň はなぜ生じたものだろうか。(Ma) には ňiməŋi とは別にさらに simaŋi「桐の実の油」がある。

(13)「血」で述べたのと同様、「油」も (Ek) imuu-, (Na) simu- (いずれも意味は「油を塗る」) などに代表される動詞語幹から派生されたものと考えられる。

(21) [55]さけ (酒) (liquor, wine)

		(Hz) arki		(J) nurə
(Ew) minə	(Ek1) arakii	(U) a(')i	(Na) araki	(Si) iariki
(S) arixi	(Ek2) araki	(Oc) araki	(Ut) arakki	(Ma) arki

(Ew) minə はロシア語 vino より。(J) と同語源の語として C. は (Ek) nərə- (<Mo)「蒸留する」、(Ma) nurə, ňiru, nurəə (意味はいずれも「ワイン (?)) があがっているが、(Na) 及び (S) は (Ma) からの借用によるものだろう。

その他は同語源でモンゴル語から入ったものだが、(Oc) の語形は r を含んでいるので、この言語での r 脱落が起きた後に入ったものということになる。

(22) [56]タバコ (tobacco)

		(Hz) damxi		(J) ——
(Ew) təbəəki	(Ek1) tamakii	(U) dami	(Na) damaxi	(Si) daməŋə
(S) daŋga	(Ek2) ňimisinna	(Oc) damisi	(Ut) saŋna	(Ma) dambagu

(Ew) はロシア語より。(Ek2) の出自は不明。津曲 (1992) は (Ek2) のインフォーマントよりdamga「タバコ」、C. も (Ek) damga「タバコ」を記録している。

(Ut) saŋna と対応する語は他の諸言語で普通「煙」を意味するが、(Ut) での「煙」

は池上によれば指小辞がついた形saŋnakaであるという.

上記以外は同源でモンゴル語から入ったものである.

(23) [59]たべもの (食べ物) (food)

		(Hz) —		(J) —
(Ew) ǰəplɯ	(Ek1) zəptilə	(U) ǰəɯ	(Na) siaori	(Si) ǰerə ǰaqə
(S) ǰittərə jəəm	(Ek2) —	(Oc) ǰəu	(Ut) dəppi	(Ma) —

いずれも「食べる」という動詞の現在形動詞、もしくは非人称形動詞形からなる. (Na) の形が大きく異なることについては (45)「食べる」で後述する.

(24) [61]たまご (卵) (egg)

		(Hz) omuxtə		(J) —
(Ew) umtɯ	(Ek1) umukta	(U) umukta	(Na) omokta	(Si) uməhan
(S) umutta	(Ek2) umukta	(Oc) umukta	(Ut) ŋojokko	(Ma) umxan

C. によれば (Ut) と同源と考えられる語は他の言語になく、参考にギリヤーク語ŋojeq「卵」をあげている.

他は同源と考えられるが、これもやはり (Ek) umuu-「卵を産む」などのような動詞語幹からの派生と考えるべきだろうか. C. は (Ek) umuk、(Na) omo (意味はいずれも「巣」) に代表される語も同源として同じ項目で扱っているようだ. なお山本 (1969) によれば (Si) uməhan は他に「骨髄」の意があるという.

(25) [63]とり (鳥) (bird)

		(Hz) təkan		(J) —
(Ew) dəəgi	(Ek1) dəgii	(U) činda(')a	(Na) ňiəčəən	(Si) Gasəhə/čičikee
(S) dəgii	(Ek2) dəgii /čiwkaačan	(Oc) čiindəkəə	(Ut) gasa/nəəčigə	(Ma) gasxa/čəčikə

I 群の諸形はおそらく (Ek) dəgii-「飛ぶ」などの動詞語幹からできたもので、C. によれば、II III IV 群の言語では同源の「飛ぶ」という動詞はあってもそれから派生した「鳥」の意の名詞はない.

II 群の語形と同源の語は C. によれば (Ek), (Ew), (N), (Ul), (Ut), (Na) で「鳥の一種の名」、特に (Ek), (Na) では「シジュウカラ」とあるので、II 群において意味の拡大が起きたのではないかと考えられる.

(Hz) の語形は (Oc), (Na), (Ma), (J) に分布する「鶏」(eg. (Na) čiko) に似るが、(Hz) には別に təko「鶏」がある。

(Na) では別に gasa「水鳥」があり、水鳥以外の鳥を示す ňiəčəə C. には (Na) の方言にある語として ňiəčiən gasa「鳥(一般名称)」があがっている。C. をみるかぎり III 群の言語は皆このようである。II 群でも gasa と同源の語は「水鳥」であるが、I 群の (Ek) gasa は「鶴」、(N) gạsa は「白鳥」であり、IV 群の (Si), (Ma) では「鳥一般」をさすようだ (C., 山本1969、羽田1937)。

逆に (Na) で水鳥以外の鳥を示す ňiəčəən と同源の語は、C. によれば (Ek), (S), (Ew), (U), (Ma), (J) に見いだされ、意味は「鴨 ((U) は子鴨)」である。

(26) [70]ナイフ(knife)

		(Hz) kucə		(J) ——
(Ew) xirkan	(Ek1) uči	(U) kusigə	(Na) kučəən	(Si) kušii
(S) usxən	(Ek2) kotokon	(Oc) kučə	(Ut) kučigə	(Ma) xuwəsi
			/geesuu/gisiruu	

(Ew) xirkan は C. によれば (Ew) のみでその出自は不明である。

(Ek2) kotokon は koto「狩猟刀」に指小辞のついたもので、C. によればこれと同源の語は I 群の諸言語と (Na) クル・ウルミ方言だけにある。

C. は上記の (S), (Ek1), (U), (Oc), (Na), (Ut) は対応するものとして一つの項目のもとに扱っているが、すると I 群の言語において u の前の k が落ちる変化があったものと考えなければならない。例えば次にみるような対応語があるので、このような変化を認めてもよいと考える; (Ek) ukun、(Na) kuun、(Ma) xuxun「乳」、(Ek) urim、(Na) kuri「灰色の」、(Ek) əwi-、(Na) kupi-「遊ぶ」。

(Ma) xuwəsi について C. は (Ma) xuwəš-「アイロンをかける」という語があることから (Na) xusiədə-とのみ比較している。

池上 (1997) によれば、(Ut) geesuu「柳などの木を削る小刀」、gisiruu「皮や布を裁断する小刀」である。geesuu と同源の語は C. によれば「削る」及びその派生語「削り屑」などとして (N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na), (Ma) にあり、これは前述の「アムール下流域」型分布であるが、相互に音対応しているので満洲語から広まったとは考えにくい。

(Ut) gisiruu と同源の語は C. によれば、「裁断する ((Ek) gir-)」及びその派生語で全ツングースにある。

(27) [77]いと (糸) (thread)

		(Hz) sirgə		(J) togo
(Ew) xum	(Ek1) subə	(U) siəktə	(Na) kupən	(Si) toŋə
(S) širəttə	(Ek2) tomko	(Oc) sumu	(Ut) kupə/tokpo	(Ma) toŋo

(Ew), (Oc) と対応する語形は、C. によれば全ツングースにあって「腱」の意である。そのうち (Ma) subə、(S) sumul「腱」となっているので、上記の (Ek1) subə は満洲語から入ったものではないだろうか。なお Avroin i Levedeva (1978) によれば、(Oc) sumu は sumu(g) と「隠れた g」を持っている。

(S), (Hz), (U) と対応する語は、C. によれば主に「繊維」、「糸」などの意で全ツングースにあり、(lit.Mo) sirüsün「腱」sirkeg「繊維」が参照されている。

(Ut) のうちの tokpo と、(Ek2) 及び IV 群にみられる語形と同源の語も、C. によれば相互に対応する形で全ツングースにあり、ほとんどが同じ形で「糸をよる」という意味の動詞を持っており、ここでも (lit.Mo) tomu-「糸をよる」が比較されている。

(Na) kupən、(Ut) kupə と同源の語は C. によれば (N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na) にあり、ほぼ「アムール下流域」型の分布をしている。しかも (N), (Oc) は「木棉の糸」である。

大胆に想像すれば、かつてツングースには sum 系の「腱」を指す語が元からあり、その後モンゴルからの借用語がかなり古い時代にもたらされ、最後にサンタン交易のルートに沿って「木棉の糸」が広まったと考えることができるのではないか。

(28) [79]きもの (着物) (clothes, clothing)

		(Hz) tərgələ		(J) ——
(Ew) oj	(Ek1) tətii	(U) təgə	(Na) tətuə	(Si) utuku
(S) təggəčči	(Ek2) najama	(Oc) təggə	(Ut) tətuwə	(Ma) ətuku

(Ew) oj は「上」の意で、「上に着るもの」の意であろう。

(Ek2) najama は「ヘラジカ製の服」で、インフォーマントもやはり「皮製の服」としていた。C. によればこれと同源の語は (N) を除く I 群の言語及び (Ma) にある。

(Ma) ətuku は (Na) や (Ut) の語形から t- が落ちたような形をしているが、C. は別項目で扱かっている。

他の (S), (Ek1), (Hz), (U), (Oc), (Na), (Ut) の諸形は対応するものと考えられ、群によってそれぞれの派生形は異なっているけれども、どれも動詞「着る」からの派生語と考えられる。

(29) [80]かみ (紙) (paper)

		(Hz) xaosan		(J) xauša
(Ew) gumaaga	(Ek1) čaasun	(U) xauja	(Na) xaosan	(Si) hošin
(S) saasun	(Ek2) gumaaji	(Oc) xausa	(Ut) xaosali	(Ma) xauša

(Ew), (Ek2) はロシア語 (bumaga) から入ったものと考えられるが、語頭の b が g になっている. (Ut) でも「お金」の意で同じ語を借用しているが、やはり同様に g になっている. これらは唇音の連続を避けて異化が起きたものだろうか.

(S), (Ek1) は最近モンゴル語から入ったものである.

上記以外は同語源で、C. によれば II III IV 群の言語と I 群ではネギダル語のみにあるので、典型的な「アムール下流域」型分布である. またその形から II 群の言語とネギダル語には、これらの言語で語頭の x が落ちる変化のあった後に入ったことがわかる.

(30) [81]もの (物) (thing)

		(Hz) zaka		(J) xačin
(Ew) nukta	(Ek1) jəəm	(U) xaǰuu/baja	(Na) ——	(Si) ǰaqə
(S) jəəm	(Ek2) šæjæuuši	(Oc) xaǰu	(Ut) ——	(Ma) ǰaka

(Ew) nukta は C. によれば (Ew) のみにしかなく、出自が不明である. (Ek2) の語形は C. にも見いだせなかった.

(Ek1) の jəəm について、津曲 (1992) は jəəmə と記録し、C. の eema「どんな」を参照しているようだ. (S) とともにモンゴル語からの借用の可能性も考えられよう (ただし母音が異なる; (lit.Mo) jaGum, (Mo) jum).

(U), (Oc) の語形は、C. によれば典型的な「アムール下流域」型分布で ((N) (Oc) (Ul) (Ut) (Na)), III 群のみならず (N), (Oc) にも語頭の x があるので I II 群での語頭の x- の脱落以後の借用である. (Na) では「物 (一般)」という意味よりも「(狩猟のための、衣服も含めた) 道具、武器、家財道具」など、「(ある目的のための) 道具」を示す. III 群の言語であればおそらく同様であろう.

(上記のインフォーマントからは得られなかったが), 一方 (Na) では普通「物 (一般)」を示すのに上記 (Si), (Ma) と同源の ǰaka が用いられる. これと同源の語は C. によれば (Ek) の各方言、(S), (Na), (Oc) と III IV 群にあるが、(Ew), (U) にない.

(J) の同源語は、C. によれば「アムール下流域」型分布で ((S), (N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na), (Ma), (J)),「種類、さまざまな」などの意である. (Ul) には「物」の意も

あるという.

(31) [83]むし (虫) (worm, insect)

		(Hz) —		(J) —
(Ew) magǰili	(Ek1) kulikan	(U) kuliga/uŋulu	(Na) pəəntə	(Si) imahə/ñimahə
(S) xulixan	(Ek2) kulikan	(Oc) kulæ	(Ut) koliga	(Ma) umijaxa/imijaxa

(Ew) magǰili と同源の語は C. によれば (Ek), (U), (Na)「クネクネさせる、クネクネしている」と (N)「まわりじゅう」で、「虫」の意味は (Ew) だけであり、しかも「貝」もさす.

上記の (S), (Ek1 2), (U), (Oc), (Ut) と同源の語形は C. によれば I II III 群に分布し、(Ek), (S) は kuliin, xoleen のように指小辞がつかない形が「蛇」、ついた形が「虫」であり、(N), (U), (Oc) では上記の形が「虫」で、特に (U) と (Oc) では「虫 (蛇を含む)」とある. (Ew) ではなんと「蚊」である. III 群ではやはり「虫」をさし、蛇の方は「這う」という動詞語幹から派生した語が使われているようだ.

(Na) pəəntə は「みみず」だが、これと同源の語は C. によれば (Ek) (の一部の方言), (N), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Ma) では「アザラシ」である. (Na) でも民話などでは「アザラシ」の意で使われている例がある.

IV 群の諸形と同源の語は C. によれば (Ek), (Ew), (N), (Oc), (Ut), (Na), (Ma), (J) にあって意味は「ウジ」((U) と (Ma), (J) は「虫」)」である.

(32) [89]さかな (魚) (fish)

		(Hz) imaxa		(J) liwaxa
(Ew) olruı	(Ek1) oldo	(U) sugǰa	(Na) sogdata	(Si) ñiməhaa
(S) osxon	(Ek2) ollo	(Oc) sugǰasa	(Ut) suŋdatta	(Ma) ñimaxa

(S) と同源の語は C. には (S) oxson であがっており、(S), (N), (Ut), (Na), (Ma) にあるが、(N), (Ut), (Na) は「ウグイに似た語」、(Ma) は「カワスズキ」である. (S) で意味の拡大が起きたと考えられる.

(Ew), (Ek1), (Ek2) と同源の語は C. によればさらに II III 群にもあるが「煮た魚」の意である. 祖形はおそらく *xolso である.

(U), (Oc), (Na), (Ut) と同源の語は C. によれば I 群の各言語にもあるが、「コクチマス、春のサケ・マス、ニジマス、カワメンタイ」など特定の種の魚をさす.

IV 群の諸形と対応する語として C. は (Ek) leemba「サケ・マス」、(Ul) nimo,

nimo「コクチマス」をあげている。なおこれと同源の語はⅣ群のみならず (Hz) 及び (Na) のクル・ウルミ方言、ビキン方言にあって、風間 (1996b) で述べたアムール中流域言語圏に分布しているものである。

(33) [94]いぬ (犬) (dog)

		(Hz) inaki		(J) indaxum
(Ew) ŋin	(Ek1) ninakin	(U) ina(')i	(Na) inda	(Si) jonəhun/inəhun
(S) ninixin	(Ek2) ŋinakin	(Oc) inaki	(Ut) ŋinda	(Ma) indaxūn

上記の全ツングースの語形がお互いに対応すると考えられるが、(Ew) とⅢ群の言語では他の言語にある語末の -kin という接尾辞が欠けている。池上 (1989 p. 1078) ではやはりほぼ全ツングースにある「リス」、「肝臓」という語で、Ⅲ群の言語だけに *kii, *-kin という接尾辞が欠けていることを指摘している。

(34) [112]いえ (家) (house, home)

		(Hz) ǰo		(J) bogo
(Ew) ǰuu	(Ek1) ǰuug	(U) ǰugdi	(Na) ǰoo	(Si) boo
(S) ǰuu	(Ek2) ǰuu	(Oc) ǰugba	(Ut) duxu	(Ma) boo

Ⅰ Ⅱ Ⅲ群の諸形は互いに対応するが、C. によればⅣ群に対応する語がない。一方 C. によればⅣ群にみえる語形は (Ma) と (J) だけで、漢語の「房 (fang^2)」を参考にあげている。

Ⅱ群の (U), (Oc) の形はそれぞれ与格、対格の形をしており、実際格をとる時には -di や -ba が落ちるが、そのままの形に格がついた形も確かに現れる。したがって揺れていると見るべきだろう。なおここには現はれていないが、(Ul) では ǰuu/ǰoo が使われずに、他の言語で「熊の洞穴」などを示す (Ul) xagdun が「家」の意で用いられる。

(35) [117]かね (金) (money)

		(Hz) ǰixa		(J) ——
(Ew) məŋən	(Ek1) məgun	(U) ǰi(h)a/teeǰa	(Na) ǰixa	(Si) ǰihaa/məŋun
(S) mugun	(Ek2) məŋun	(Oc) ǰixa	(Ut) gumaska	(Ma) ǰixa/məŋun

Ⅰ Ⅳ群にみられる諸形 ((Ew) məŋən 及びその対応形) は全ツングースにあり、共通

して「銀」の意味を持つが、(Ek), (Ew), (Ut) ではさらに「金 (gold)」の意味もある。チュルク系の言語の影響によるものだろうか。

(U) teeja は不明。漢語の破子 (die^{2}zi)「[名詞] 小皿、平たい感じのする皿、[量詞] 皿を単位として数える時(倉石 1985 より)」からであろうか。

上記のII、IV群及び (Na) にみられる語形はC. によればさらに (S), (N), (Ul), (Ut) にもあり、「アムール下流域」型分布であって、おそらく満洲語から広まったものであろう。

(36) [118]き (木) (tree)

		(Hz) mo		(J) mo
(Ew) xiakita	(Ek1) moo	(U) moo	(Na) moo	(Si) moo
(S) moo	(Ek2) moo	(Oc) moo	(Ut) moo	(Ma) moo

C. 及び Novikova (1980) によれば (Ew) にも moo「木」がある。C. によれば xiakita は (Ek), (Ew), (N) にあってその意は「カラマツ」である。Novikova (1980) はその意を「(1) カラマツ (2) (生えている) 木」としている。

(37) [121]くさ (草) (grass)

		(Hz) oroxtə		(J) orxo
(Ew) ňeečə	(Ek1) orokto	(U) sokta/uwokto	(Na) ňaǰaxa	(Si) orəhə
(S) orotto	(Ek2) orokto	(Oc) ookto	(Ut) orokto	(Ma) orxo

(Ew) の語形についてC. はňee-「出る」と同源のものとして扱っている。-čə はこの言語で完了の形動詞形なので、「出たもの」とでも解釈されることになる。C. によれば、ňee- と同源の「出る」は IV 群を除く全ツングースにあるが、「草」の意の派生語は (Ew) のみにしかない。

(Na) ňaǰaxa は、C. によればさらに (Ul) (ňaǰaxa) と (Ma) (ňančixa) だけにあっていずれも「草」の意である。

一方で上記の (S) orotto と同源の語はC. によればI II 群と III 群には (Ut) だけにあり、(Na) と (Ul) にはない。またI II 群では基本的に「干し草、藁」の意であるという。III 群では (Na), (Ul) で ňaǰaxa が orokto を駆逐したか、(Ek) から (Ut)に orokto が入ったかのどちらかの可能性を考えなければならない。なおC. では orokto と同源として (Ma) orxoda「朝鮮人蔘」をあげ、これは II III IV 群にあるとしているが、これも満洲語から広まったものであろう。

(38) [124]は (葉) (leaf)

		(Hz) abdəxsə		(J) abuxa
(Ew) əbdərum	(Ek1) napči	(U) abdia	(Na) xabdata	(Si) afəhə
(S) načči	(Ek2) abdanna	(Oc) abdasa	(Ut) xamdatta	(Ma) abdaxa

(S), (Ek1) の語形は、C. によれば (Ek), (S) のみにあり、借用である ((lit.Mo) nabči「葉」).

それ以外はおそらく同源の語 *abdansa に遡ると考えられ、*-nsa は接尾辞である可能性がある。C. によれば同源の名詞形「葉」は (S) を除く全ツングースにあり、(Ma) のみに動詞 abda-「先端を折り取る、枝を折る」があるとしている。羽田 (1937) には abtala-mbi「樹枝を整える、間伐する」としてあがっている。

(Ma) にはさらに二重語として afaxa「紙の一枚」があるが、C. はこれを (J) よりの借用としている。

(39) [125]はな (花) (flower, blossom)

		(Hz) ilga		(J) ilxa
(Ew) ňeəčə	(Ek1) ilgaa	(U) ilaa	(Na) kəkuu	(Si) iləxaa
(S) ilgaa	(Ek2) oňo	(Oc) ilakta	(Ut) sillaa	(Ma) ilxa

(Ew) ňeəčəは (37)「草」と同じ語だが、Novikova (1980) にもやはり両方の意があがっている。(Ek2) oňo は oňo-「描く」より派生したものと考えられるが、「飾り、模様」の意だけで、「花」の意では Vasilevich (1958), Kolesnikova i Konstantinova (1960), Boldylev (1994) のいずれの辞書にも見いだせない。あるいは取り間違いか。

(Na) kəkuu はC. になく不明だが、Onenko (1980), Onenko (1986) には kəkuukəən「花」があがっている。

上記の (S) をはじめとする語形は C. によれば全ツングースにあり、(Ew), (N), (Oc), (Na) では「模様、飾り」の意であるが、I 群の諸言語と (Na) には満洲語より入ったものとみている。するとI 群の諸言語が満洲語と接触した時期があったと考えなければならないが、これはどうだろうか。また (Ul), (Ut) ではそれぞれ sila, silla「花」がある他に、irga「模様、飾り」があって *ilga に遡るものとみているが、一般に (Ul), (Ut) では音節末の r が l になっているので、これだけは逆の方向への変化と考えなければならないことになる。池上 (1997) ではこの語の対格を irgambi と記録しており、このことはこの語が本来語末 n を持つことを示している。

(40) [126]み (実) (fruit, nut)

		(Hz) —		(J) tuwəxə
(Ew) bokuut/təwtuu	(Ek1) —	(U) kusta/səutigə/kimokta	(Na) bookto	(Si) —
(S) —	(Ek2) —	(Oc) gəbəku	(Ut) siduxu	(Ma) —

ツングースの居住域である南は沿海州から北はシベリアにわたる北方の地域における「実」とは、我々の考えるような「果物」のそれではなく、ベリーの類や松ぼっくりである。このことは以下に考察する語に反映されているが、他方この語彙を採集することの難しさの原因になっている。

C. によれば (Ew) bokuut, (Na) bookto と同源の語は (S) を除く全ツングースにあり、(U) を除いて「クルミ」もしくは「松ぼっくり」の意である。

C. によれば (Ew) təwtuu と同源の語は (S) を除く I 群の言語で広くベリーの類を指し、(Oc), (Ul), (Ut), (Na) ではコケモモである。

(J) tuwəxə について C. は (S) tuwik, (Ma) tubixə「実」のみと同源としているが、(J) や (Ma) の -xə は (Ek) などの -ktə と多く対応するから、(Ek) təwuktə と同源である可能性もあるのではないか。

(S) では別のインフォーマントから (S) ǰimsə が得られたが、これはモンゴル語からの借用である ((lit.Mo) ǰimis 小沢 1983 による)。

(U) kusta については、kusikta としてなら C. にあり、これは「クルミ」の意で (Ek), (Oc), (U), (Ul), (Na), (J) にあるという。(U) səutigə と同源の語は C. によれば (U) と (Na) だけにあり、「松ぼっくり」である。(U) kimokta は C. に対応する語を見いだせなかった。

(Oc) gəbəku について、C. によれば、(Ew) (アルマン方言) gərbəə-、(U) gəgbə- (意味はともに「ベリーを集める」)、(Na) gəgbəli-「もぐ」があり、これから派生したものと考えられる。C. は (U) には動詞と名詞を共にあげ、(Oc) には名詞のみをあげている。

(Ut) siduxu「コケモモの実」(池上 1997) は C. になし。

(41) [127]たね (種) (seed)

		(Hz) uzə		(J) —
(Ew) čəinə/ňaŋta	(Ek1) ňiintə	(U) —	(Na) čəməə	(Si) usuu
(S) ur	(Ek2) šeema	(Oc) čəməňi	(Ut) —	(Ma) usə

(Ew) čəinə はインフォーマントによればロシア語の semja「種」からであるという。

(Ek2) šeema もやはりロシア語からと考えられる (津曲 1992). (S) はモンゴル語からである ((Mo) ür). (Ek1) ňiintə はⅠⅡⅢ群で「根」で、取り間違いかもしれない.

C. によれば (Ew) ňaŋta と同源の語は (Ek), (Ew), (Oc), (U) で「松ぼっくり、クルミ」で、(Ut), (Ma) にも同源とみられる語がある.

上記の (Oc), (Na) に同源の語は、C. によれば (Ek), (Oc), (U), (Ut), (Na) にあり、「もみ、種、クルミの種」の意である.

(Hz), (Si), (Ma) にみられる語は C. によれば (Oc) (uši), (Ul) (usə), (Na) (usə), (Ma) (usə) にあり、意味はいずれも「種」である. これは満洲語から広まったものではないだろうか.

(42) [129]たはた (田畑) (field, acres, rice-field)

		(Hz) usin		(J) ušin
(Ew) agaraat	(Ek1) tarigaaŋŋii buga	(U) talii	(Na) usin	(Si) ušin
(S) taragan	(Ek2) —	(Oc) —	(Ut) —	(Ma) usin

(Ew) はロシア語 ogorod「畑」より. C. によれば上記の (S), (Ek1) の語形は (lit. Mo) tari-「種をまく」からで、同源の語は (Ek), (S), (Oc), (U), (Ul), (Na), (Ma) に分布しているが、C. でも上記の (U) の語形と同様、(U) は tali「畑、野菜」としており、r が l になっている. (U) では r は歴史的に皆脱落したはずだが、借用した時期によっては l になったものもあるのだろうか.

(Hz), (Na) 及びⅣ群にみられる語形と同源の語は、C. によれば (U) を除くⅡⅢⅣ群にある. 筆者の別のインフォーマントからの調査では (U) にもやはり ui「畑」がある.

(43) [132]みち (道) (way, road)

		(Hz) foxtu		(J) ǰugu
(Ew) xotaruun	(Ek1) xokto	(U) xokto	(Na) pokto	(Si) ǰohən
(S) təggu	(Ek2) xokto	(Oc) xokto	(Ut) pokto	(Ma) ǰugūn

(S) təggu は (lit.Mo) teregür「(多勢の通る) 広い道」(小沢 1983) からであろう.

Ⅳ群にみられる語形と同源の語は、C. によれば (Ek) ǰugu, (Ew) ǰug, (S) ǰugで「方向、側」であり、(U) に ǰuu-「狙いをつける」があって、(lit.Mo) ǰüg「方向、側」を参考にあげている.

(Ew), (Ek1) をはじめとする諸形は同源と考えられ、C. にはさらに (Ma) oktoron

「ウサギの足跡」もあがっている。(Ew) の語末にみられる -ruun が何であるのかわからないが、この (Ma) の -ron と同源のものだろうか。

(44) [135]かわ (川) (river)

		(Hz) bira		(J) bira
(Ew) okaat	(Ek1) bira	(U) uli/biasa	(Na) maŋbo/biraa	(Si) biraa
(S) doo	(Ek2) bira	(Oc) uli	(Ut) uňi	(Ma) bira

(Ew) okaat は C. によれば (Ew) の諸方言にみられるのみでその出自は不明である。

(S) doo は C. になく、出自もわからない。(U), (Oc) の uli について C. は (Ul) ula「氷の地下洞」、(Ma) ula「大河」と比較している。(U) uli は他のツングースと違って「水」の意もある。なお (lit.Mo) usu-n も「水、河、川」の意があるようだ (小沢 1983)。

(Na) maŋbo と同源の語については、池上 (1987) に詳しい考察があるのでここでは触れない。

(Ut) と同源の語について C. は (Oc), (Ul), (Ut), (Na) で「大きくない川」、(Oc), (U) では「アニュイ川」の意の語をあげている。

(Ek1) bira をはじめとする諸形は C. によれば全ツングースにあるが、(Ew) だけは、オホーツク方言の民話にのみ bira があり、また指小辞のついた形と考えられる birakčan が方言によって「小川、小川のある低地、くぼ地、峡谷」などのさまざまな意味であるだけである。

(45) [136]やま (山) (mountain)

		(Hz) urkən		(J) alin
(Ew) xəəpkəčən	(Ek1) xoroon	(U) uwə	(Na) xurəən	(Si) alin
(S) ur	(Ek2) urə	(Oc) uwə	(Ut) xurigə	(Ma) alin

(Ew) と対応する語は C. によれば (Ek), (Ut) のみにあって「(沼の) 谷地坊主」の意であるという。分布及び形からみて (Ut) のそれは (Ek) からの借用であろう。

(Ek1) xoroon は C. によれば「(頭の) 天辺、頂、峠、先端」などの意でひろく I II III 群にあり、(Ma) では「つむじ」である。

IV 群の alin については C. は (Ek) alan-、(Ew) alan-「山脈をこえる」、(U) ala「低地」、(Na) ala「低い山」を比較している。

それ以外の (S) ur をはじめとする諸形は互いに対応すると考えられる。C. によれ

ば (Ew) にも urəəkčəən「山」がある。(Ut) は (8) xuriga「鼻」、(26) kučigə「ナイフ」の時と同様語末の g (<*k) をよく保存している。

(46) [143]みず (水) (water)

		(Hz) mukə		(J) mukee/mukuu
(Ew) məə	(Ek1) muu	(U) uli	(Na) muə	(Si) mu
(S) muu	(Ek2) muu	(Oc) muu	(Ut) məə	(Ma) mukə

C. によれば (U) にも他の言語の諸形と同源の派生語と考えられる mudə「洪水」、muləxi「バケツ」などの語がある。

(47) [145]いし (石) (stone)

		(Hz) zolu		(J) wəxə
(Ew) ǰol	(Ek1) zolo	(U) ǰolo	(Na) ǰolo	(Si) vexee
(S) ǰolo	(Ek2) ǰolo	(Oc) ǰolo	(Ut) ǰolo	(Ma) wəxə

IV 群の諸形について C. は (45)「山」でみた (Ek) urə, (Na) xurəən などと同源とみている。C. によれば (Ew) のコリマ・オモロン方言にのみ urakčan の形で「石」がある。

(48) [146]つち (土) (earth)

		(Hz) tukalə/naa		(J) boixo
(Ew) təər	(Ek1) kurisun	(U) naa	(Na) naa	(Si) boihən/biohun
(S) širtan	(Ek2) tukala	(Oc) —	(Ut) naa	(Ma) boixon

C. によれば (Ew) təər と同源の語は (Na) turka「土の塊」を除けば (N) と (Ek) の東方言にのみ対応する語形があるという。

(S) は (lit.Mo) sir「土の塗料」(小沢 1983) だろうか、C. にはない。

(Ek1) kurisun は (lit.Mo) körüsü-n「物の外殻、地表」より (津曲 1992)。

(Ek2), (Hz) にみられる語形と同源の語は、C. によれば「土、粘土、汚れ、ゴミ」などの意で広く I II III 群にある。

II III 群にみられる naa は、(Na) などでは「大地、場所」などの広い意味を持ちよく使われる。C. によれば (Ma) にもあるが、(N) を除き I 群には欠けているという。その一方で I 群では「場所」の意には buga 及びその同源語が使われる。

IV 群にみられる (Ma) boixon をはじめとする語形は、C. によれば (Ma) と (J) の

みである.

(49) [151]ひ (火) (fire)

		(Hz) too/tua		(J) tuwə
(Ew) tog	(Ek1) togo	(U) too	(Na) tawa	(Si) tuaa
(S) tog	(Ek2) togo	(Oc) too	(Ut) tawa	(Ma) tuwa

祖形として *tuga をたて、I II 群で母音の順行同化が、III 群で逆行同化が起きたと考えることを提案したい.

(50) [152]かぜ (風) (wind)

		(Hz) ədin		(J) ədun
(Ew) ədun	(Ek1) ədin	(U) ədi	(Na) xədun	(Si) udun
(S) ədin	(Ek2) ədin	(Oc) ədi	(Ut) xədu	(Ma) ədun

(51) [153]くも (雲) (cloud)

		(Hz) tuxsu		(J) tugi
(Ew) təgəəčin	(Ek1) təksə	(U) tokia	(Na) təwəksə	(Si) tukusu/tiuxi
(S) təčči	(Ek2) tuuxu	(Oc) tokso	(Ut) təwəksə	(Ma) tugi

(Ew) では -ks- は -s- となるべきなので、上記の語形は対応に合っていない. 一方で (Ek2) の語形は -ks- > -s- > -x- の変化の跡を示している. (Ek1) の語形について、津曲 (1992) は tuksu と聞き取っている. テープを聞きなおしてみたが、筆者には ə のように聞こえる.

また II 群でやはり男性母音の語となっている ((20)「油」の項参照).

(52) [155]あめ (雨) (rain)

		(Hz) tigdə		(J) aga
(Ew) udun	(Ek1) udun	(U) tigdə	(Na) tugdə	(Si) ahaa
(S) udun	(Ek2) tigdə	(Oc) tigdə	(Ut) tugdə	(Ma) aga

(Ew), (S), (Ek1) の語形について、C. には (Ek) udun「風を伴った雨」、(S), (Ew) は「雨」、(Oc) udu(n)「夏の雨」、(Ut) udala「カエル」とあり、奇妙な分布を示している.

一方 (Ek2) tigdə と同源の語は C. によれば Ⅳ 群にこそないが Ⅰ Ⅱ Ⅲ 群にひろく分布している。ただ Ⅰ 群では (S) は「雨が降る」という動詞形のみ、(Ew) は「悪天候、雨天」とややその使用が限定されている。

Ⅳ 群にみられる語形は C. によれば Ⅳ 群のみにあり、(lit.Mo) aγar「大気、空気」を参考にあげている。

(53) [157]そら (空) (sky)

		(Hz) abka		(J) abka
(Ew) ňaaňin	(Ek1) naŋna	(U) ňaŋňa	(Na) boa	(Si) afəqaa
(S) təŋgər	(Ek2) buga	(Oc) bua	(Ut) boo	(Ma) abka

C. によれば (Ew) ňaaňin と同源の語は (Ek), (Ew), (N), (Oc), (U), (Ut), (Ma) にあり、いずれでも「空」の意である。

(S) はモンゴル語より。

(Ek2) buga をはじめとする語形は C. によれば全ツングースにあり、いずれの言語でも「大地、空、天気、宇宙、神」などの広い意味を示すが、(Ew) と (Ma) には「空」の意がなく、(Ma) ではもっぱら「場所」の意に偏っている。

(Ma) abka をはじめとする Ⅳ 群の語について C. は、(lit.Mo) abaγai「尊敬すべき父」を参考にあげ、(U) abuga「父」も同源とみている。

(54) [159]たいよう (太陽) (sun)

		(Hz) siwun		(J) ——
(Ew) ňeeltun	(Ek1) siguun	(U) suu	(Na) siun	(Si) šun/sun
(S) šigun	(Ek2) siwun	(Oc) səu	(Ut) suun	(Ma) šun

(Ew) ňeeltun について C. は (Ew) ňee-「出る」からの派生と考えている。C. によれば ňee- と同源の「出る」の意の語は Ⅰ Ⅱ Ⅲ 群のどの言語にもあるが、「太陽」の意の派生語は (Ew) の他には (Ek) の東方言に juultən その他の語形であるだけである (詳しくはアイン、トッティン、ウルミ、チュミカンの 4つの東方言、なおそこでは「東」の意もある)。また C. によれば (Ek) juu-/ňuu-、(Oc) ňuu- の「出る」には「日が昇る」の意もあがっている。

その一方で (S) šigun をはじめとする語形は C. によれば (Ew) 以外の全ツングースにある。

なおここには現れなかったが、特に (Ek) に特徴的な語彙として dilačaa「太陽」が

ある。C. によればこれと同源の語は (S) と (N) にのみ見いだされる。

(55) [160]つき (月) (moon)

		(Hz) bia		(J) bija
(Ew) biag	(Ek1) beega	(U) bia	(Na) bia	(Si) biaa
(S) beega	(Ek2) beega	(Oc) bææ	(Ut) bee	(Ma) bija

(56) [162]ほし (星) (star)

		(Hz) ušaxta		(J) ošixa
(Ew) ——	(Ek1) oosikta	(U) waikta	(Na) xosiakta	(Si) ušihaa
(S) oošitta	(Ek2) oxikta	(Oc) xosikta	(Ut) uňigəri/xosikta	(Ma) usixa

調査では不手際で採れなかったが、(Ew) にも oosikat「星」がある。

(Oc) xosikta は語頭に x- があるので、III 群からの借用語と考えねばならない。

(Ut) uňigəri は C. によれば (Ut) にしかなく、池上 (1997) はギリヤーク語の uňγr を参考にあげている。なお C. には (Ut) wasikta「星」としている。

(57) [163]ひ (日) (day)

		(Hz) iňiŋ		(J) inəŋi
(Ew) inəŋ	(Ek1) inəŋi	(U) inəŋi	(Na) iňi	(Si) inəŋi
(S) inigə	(Ek2) inəŋi	(Oc) inəŋu	(Ut) inəŋi	(Ma) inəŋi

C. をみてもやはり全ツングースにあるが、C. によれば (Ek), (Oc), (Na) と I II III 群にわたって inə-「夜が明ける」という動詞があるので、これもこの動詞から派生したものと考えられる。C. はさらに (Ek) inə-, (Na) ində- などの「一日を過ごす、一日休む」を同じ項目のもとに扱っているが、I II 群で起きた -n- < *-nd- の変化を考えれば、I 群では現在同じ形になってしまってはいるもの、「夜が明ける」と「一日をすごす」は別の語源に遡るものと考えられる。

(58) [166]つき (月) (month)

		(Hz) bia		(J) ——
(Ew) atkikan	(Ek1) beega	(U) bia	(Na) bia	(Si) biaa
(S) beega	(Ek2) beega	(Oc) bææ	(Ut) bee	(Ma) bija

(Ew) atkikan は、C. によれば (Ew) のみで、「(天体としての) 月」の意もあるよう

だが、その出自はわからない。

(59) [167]とし (年) (year)

		(Hz) aňi		(J) anija
(Ew) anŋan	(Ek1) annaňii	(U) aŋaňi	(Na) aiŋaňi	(Si) aňi
(S) aňee	(Ek2) anŋanňi	(Oc) aŋŋaňi	(Ut) anaňi	(Ma) anija

(Hz) には əi arŋa「今年」などの句としての表現の中に、より古い形と考えられる arŋa が残っており、これが祖形の *-rŋ- を保っていると考えられることは風間 (1996a) で述べた。

(60) [168]あさ (朝) (morning)

		(Hz) —		(J) ərtə
(Ew) bajĭkuur	(Ek1) timačina	(U) timadila	(Na) čimii	(Si) erədee
(S) əddə	(Ek2) təgəltənə	(Oc) timai	(Ut) čimai/čimaňi	(Ma) ərdə

C. によれば (Ew) bajĭkuur と同源の語は (S) を除く I 群と II 群にあり (ただし (Ek) は東方言のみである), 意味はやはり「朝、朝早く」で (U) では「日の出た直後」である。

(S) əddə について C. は、(Ek)(< ヤクート語、以下 (Yak) と略す), (S)(< (Ma) < (Mo)), (Ew) (< (Yak)), (Na)(< (Ma), (Ma)(< (Mo)) としており、意味は (Ek), (S), (Ew) が「朝早く」、(Na), (Ma) そして (Mo) は「早い」である。

(Ek2) təgəltənə について C. は (Ek) təgə-「座る」から派生した語と考えている。この動詞はもちろん全ツングースにあるが、C. によれば (S) と IV 群以外では「起きる」の意も明記されている。ただ「朝」の意の派生語がそれから形成されているのは (Ek) だけのようである。

(Ek1) timačina をはじめとする語形は以下の (64)「明日」に同源の語が多くみられる。C. によれば、(S), (Ew) ではもっぱら「明日」、(N), (Oc), (Ma) では同形で両方の意があり、III 群では *timaki「朝」、*timana「明日」のような形の上での対立があるようだ。(Ek) では timaaňii「朝」、timaatnə「朝、明日の朝」としている。なお Avrorin i Levedeva (1978) では、(Oc) の語形を timaki としている。

(U) の語形は子音終わりの語につく処格形の形 (-dila) をしているがどうであろうか。

(61) [169]ひるま (昼間) (afternoon)

		(Hz) inin		(J) inəŋi gəli
(Ew) inəŋ	(Ek1) inəŋi	(U) inəŋi	(Na) iñi	(Si) inəŋə
(S) inigə	(Ek2) inəŋi	(Oc) inəŋu	(Ut) inəŋi	(Ma) inəŋi

(62) [171]よる (夜) (night)

		(Hz) dolbu		(J) dorowo
(Ew) dolbuɪ	(Ek1) dolbo	(U) dogbo	(Na) dolbo	(Si) diovərə
(S) dobbo	(Ek2) dolbo	(Oc) dobbo	(Ut) dolbo(ñi)	(Ma) dobori

(Ma) の語尾にある -ri は ňəŋňəri「春」、ǰuwari「夏」、bolori「秋」、tuwəri「冬」、siksəri「夕方」にみられるものと同様に、ərin「時」との複合から生じたものであろう。

(63) [172]きのう (昨日) (yesterday)

		(Hz) siksə		(J) ——
(Ew) tiiñiw	(Ek1) tiiñibə	(U) tiinəŋi	(Na) čisəəñiə	(Si) čikəsee/čekəsee
(S) tiinugu	(Ek2) tiinəwə	(Oc) tinəu	(Ut) čeennee	(Ma) siksə

上記の (Ew), (S), (Ek1), (Ek2), (U), (Oc) の語形について、C. はⅠⅡ群と (Ut) čiňəə/činə にあるとしている。一方で C. は (Na) čisəəñiə と同源の語は別項目としてたて、Ⅲ群にしかないとみている。

つまりはこの二つの系統の語群は相補的に分布しているわけで、しかもⅠⅡ群では *ti- + inəŋu「日」、Ⅲ群は čisə- (< tisə-??) + inəŋu という構成からなっているようにみえる。ti-「過ぎる」というような動詞があったと考えると好都合だが、今後の研究が必要だ。

siksə は C. では (S) を除くⅠⅡⅢ群の全言語で「夕方」の意としてあがっているが、なぜか (Ma) siksə が全くあがっていない。他方 Zhang et al. (1989) 及び羽田 (1937) には (Hz) siksərin「夕方」、(Ma) siksəri「夕方」があがっていて、これらが他の言語の siksə の位置を埋めている。このように「夕方」と「昨日」が同語源の語で示されることは、先にみた「朝」と「明日」がやはり同語源の語で示されることと平行していると考えられる。

(64) [173]あす (明日) (tomorrow)

		(Hz) tomaki		(J) ——

(Ew) timinak	(Ek1) timii	(U) timanaŋi	(Na) čimana	(Si) čimarə
(S) timaašin	(Ek2) timi	(Oc) timai	(Ut) čimanaa	(Ma) čimari

(60)「朝」の項参照.

(65) [174]きょう (今日) (today).

		(Hz) əiñiŋ		(J) —
(Ew) ərəw inəŋu	(Ek1) əsii inəŋii	(U) əinəŋi	(Na) əiñiə	(Si) enəŋə
(S) əri iñigə	(Ek2) əxitkən	(Oc) əinəŋu	(Ut) əsinəŋi	(Ma) ənəŋi

(Ew) では修飾している指示代名詞が対格をとって名詞と一致している.

(Ew) と (S) では ərə、əri「この」が明示的に現れており、他方 (Ek1), (Ut) では əsi「今」が現れている. また (Ek2) əxitkən は<*əsitkən であり、(U) の語形も Shneider (1936) は ə(h)inəŋi としているからかつて *əsinəŋiであったことがわかる. (Na) では əi「この」、əsi「今」であるから、むしろ「この」+「日」の構成になっている. したがってどちらが本来的な方であるのか決め難い.

なお C. によれば (Ek2) にみられる əxitkən はほとんどの (Ek) の方言で「たった今」の意であり、トッキン方言として əxiitkəən inəŋ「今日」があがっている.

(66) [175]いま (今) (now)

		(Hz) əsi		(J) təə
(Ew) tiək	(Ek1) əsii	(U) ə(h)i	(Na) əsi	(Si) tee
(S) əšii	(Ek2) ərdəət	(Oc) əsi	(Ut) əsi	(Ma) tə

(Ew) と Ⅳ 群にみられる語形について、C. は同じ項目のもとに扱い、さらに (Ek) tikin、(N) tikin/tixin (意味は共に「今」) をあげている.

(Ek2) の語形について C. は、ər=dəət と=dəət を小詞とみなし、「今」の意で (Ek) の東方言の多く及び北バイカル方言にあるとしている.

(Ek1) əsii をはじめとする語と同源の語は、C. によれば (J) をのぞく全ツングースにあるが、(Ew) には əsi そのものはなく、その派生語のみで、(Ma) では「当然、正しい」などの意味でのみあがっている.

(67) [176]いつ (何時) (when)

(Hz) — (J) —

(Ew) adi čaas	(Ek1) aali	(U) ali	(Na) xaali	(Si) iatiŋə
(S) ooxidu	(Ek2) ookin	(Oc) aali	(Ut) xaali	(Ma) ataŋi

(S) ooxidu について、C. によればこれと同源の語は (S), (Ek) の他に (Ew) ook、(N) ooxin だけにあり (すなわち I 群のみに分布), 意味はいずれも「いつ」である.

他方 (Ek1) aali と同源の語は C. によれば、(Ew) ではコリマ・オモロン方言とオホーツク方言に aalik「いつか、いつも、急に、すぐに」があるだけで、(S) と IV 群にはなく、(N) は下流方言のみ、(Ek) は東、北方言のみである.

(Ma) の語形について、C. は (Na) xai「何」、同じく (Ma) では aj「何」と同源の語とみている.

(68) [178]とき (時) (hour, time)

		(Hz) ərin		(J) —
(Ew) —	(Ek1) čaas	(U) —	(Na) —	(Si) ərin
(S) ərin	(Ek2) solo	(Oc) —	(Ut) —	(Ma) ərin

(S) では他のインフォーマントより (S) saga という語形が得られたが、これはモンゴル語からの借用である. (Ek1) はロシア語からである.

(Ek2) と同源の語は C. によれば (Ek), (Ew), (S), (Ut), (Na), (Ma) にあるとし、(Ek), (Ew) には (Yak) より入ったものとみている. 意味は主に「暇な、自由な時間、余暇」であり、(lit.Mo) sula「空の、自由な」を参考にあげている. (Mo) から (Ma) に入り、さらに (Na), (Ut) に広まったものか.

(Ma) ərin と同源の語は (Ek) 以外の全ツングースにあり、意味は皆「時間」だが、(N) əjun、(Oc) əruu(n), (Ul) əru(n), (Ut) əri(n)/əru(n) と母音が奇妙な分布で異なっており (普通は III 群の u に I II 群の i が対応する、池上 1989 参照), (U) は əəli(n) と r が l になっている ((42)「田畑」参照)

(69) [179]いち (一) (one)

		(Hz) əmkən		(J) əmu
(Ew) əmun	(Ek1) umun	(U) omo	(Na) əmun	(Si) eməkən
(S) əmun	(Ek2) umukən	(Oc) omo	(Ut) geeda	(Ma) əmkə/əmkən

「一」から「十」までの数詞の対応については池上 (1989 p. 1079) に詳しい考察がある.

(70) [180]に (二) (two)

		(Hz) zuru		(J) ǰuwə
(Ew) ǰeər	(Ek1) zuur	(U) ǰuu	(Na) ǰuur	(Si) ǰuu
(S) ǰuur	(Ek2) ǰuur	(Oc) ǰuu	(Ut) dee	(Ma) ǰuwə

(71) [181]さん (三) (three)

		(Hz) ilan		(J) ilan
(Ew) ilɯn	(Ek1) ilan	(U) ilaa	(Na) ilaan	(Si) ilan
(S) ilan	(Ek2) ilan	(Oc) ila	(Ut) ilaa	(Ma) ilan

(72) [182]し (四) (four)

		(Hz) dujin		(J) duwin
(Ew) digən	(Ek1) digin	(U) dii	(Na) duin	(Si) duin
(S) digin	(Ek2) digin	(Oc) dii	(Ut) ǰiin	(Ma) duin

(73) [183]ご (五) (five)

		(Hz) sunza		(J) šunǰa
(Ew) tunŋan	(Ek1) tunna	(U) tuŋa	(Na) toiŋga	(Si) sunǰaa
(S) tuŋa	(Ek2) tunŋa	(Oc) tuŋa	(Ut) tunda	(Ma) sunǰa

(74) [184]ろく (六) (six)

		(Hz) ňiŋun		(J) ňiŋu
(Ew) ňuŋən	(Ek1) nuŋun	(U) ňuŋu	(Na) ňuŋgun	(Si) ňiŋun/ňiuŋun
(S) ňiŋun	(Ek2) ňuŋun	(Oc) ňuŋu	(Ut) nuŋu	(Ma) ňiŋun

(75) [185]しち (七) (seven)

		(Hz) nadan		(J) nadan
(Ew) nadan	(Ek1) nadan	(U) nada	(Na) nadan	(Si) nadən
(S) nadan	(Ek2) nadan	(Oc) nada	(Ut) nada	(Ma) nadan

(76) [186]はち (八) (eight)

		(Hz) zakun		(J) ǰakun
(Ew) ǰapkan	(Ek1) zapkun	(U) ǰakpu	(Na) ǰakpon	(Si) ǰaqun
(S) ǰaxun	(Ek2) ǰapkun	(Oc) ǰappu	(Ut) ǰakpu	(Ma) ǰakūn

(77) [187]く (九) (nine)

		(Hz) ujun		(J) ujun
(Ew) ujun	(Ek1) jəgin	(U) jəi	(Na) xujun	(Si) uin/ujun
(S) jəgin	(Ek2) jəgin	(Oc) xuju	(Ut) xuju	(Ma) ujun

C. は上記の語形を一つの項目のもとに扱っているが、池上 (1989) は (Ew) ujun をはじめとする系列の語と (S) jəgin の系列の語が、「それぞれ別の祖形にさかのぼることが考えられ、同じ語に由来するとは必ずしもいえない」としている。

I II IV 群では III 群の語にある語頭の x- は落ちたと考えられるので、(Oc) xuju は III 群の言語からの借用と考えられる。同じく (Oc) の xujuktə (<*xujultə)「九日間」、xuju(n) muda「九回」も III 群で使われる形だと考えられるので、これらがいっしょくたに III 群から入ったものと考えられる。

したがって (Oc) ではかつて jəgin と同源の語が使われていた可能性も考えられよう。しかしそれでも (Ew) が ujun なので、二つの系列が I II 群と III IV 群にきれいに分かれるというわけにはいかない。この分布はどうして生じたものだろうか。

(78) [188]じゅう (十) (ten)

		(Hz) zuan		(J) ǰuwa
(Ew) mian	(Ek1) zaan	(U) ǰaa	(Na) ǰoan	(Si) ǰuan
(S) ǰaan	(Ek2) ǰaan	(Oc) ǰaa	(Ut) ǰoon	(Ma) ǰuwan

C. は (Ew) mian を別の項目にたてて扱っている。

(79) [191]いくら(how much)

		(Hz) —		(J) —
(Ew) —	(Ek1) adii/ookii	(U) adi	(Na) xado	(Si) —
(S) ooxii	(Ek2) iirbaan	(Oc) —	(Ut) xasu	(Ma) —

C. によれば (S) ooxii, (Ek1) ookii と同源の語は、(Ek), (S), (Ew), (U), (Na) にあるとしているが、そこで C. があげている (U) 'olu 'olu「もっとたくさん何度も」、(Na) okukaŋa「あまり大きくない」(クル・ウルミ方言のみ) は同源の語とみなすには意味も形も大きく違っている。したがって I 群に特徴的な語とみてもよいだろう (ただし (N) にない)。

(Ek2) iirbaan は (Ek) iir「どんな、どの、どこにある」として C. にあり、ii- とい

う疑問詞を形成する要素が I II 群に広がっているが III IV 群にないことが示されている。

III群の内部で (Na) xado、(Ut) xasuと対立しているので、(Ul) がどのようであるかが問題となる。C. には両方ともあがっているが、よく調べてみると、Petrova (1935), Sunik (1985), Angina (1993) のどの記述も xasu(n) しかあげていない (なおこの語の語末には n がある、池上 1997 でも対格形は xasumba である)。(Ul) xadu「いくつ」xadulta「何日間」をあげているのは Schmidt (1923) のみで、C. はこれによったものと考えられる。Schmidt の調査時には xadu が使われていたという可能性も考えられ無くはないが、(Na) を話すインフォーマントから採ったことによる誤りではないだろうか。

(Ut) xasu(n)と同源の語は C. によれば (Ek), (Ew), (N) で asun「(同種の物、距離、時間について) いくつ、どのくらい」、(S) で asxan「少し」のみ、及び (Ul), (Ut) で xasu(n)「いくつ」である。(Na) xas「再び」も比較しているが、これは別の語に由来するものではないだろうか。したがって II IV群と (Na) にないことになる。

(80) [192]いくつ(how many)

		(Hz) adi		(J) —
(Ew) adi	(Ek1) adii	(U) adii	(Na) xado	(Si) udu
(S) adii	(Ek2) adii	(Oc) adii	(Ut) xasu	(Ma) udu

C. は上記の (Ut) 以外は全部お互いに対応するものとみている。

(81) [194]ぜんぶ (全部) (altogether, all, whole)

		(Hz) xiaok		(J) gəmur
(Ew) čəələwən	(Ek1) bies	(U) təu/təuməñi	(Na) xəm	(Si) gumə/vačixiamə
(S) xokko	(Ek2) weexen	(Oc) gaam	(Ut) gəəm	(Ma) gəmu/wačixijamə

(Ew) čəələwən は対格形で、Novikova (1980) には čəələn であがっている。Cincius i Rishes (1952) にもあがっているのになぜかC. にはない。

C. によれば (S) xokko と同源の語は (Ek) kuuktə をはじめ (Oc) を除く全ツングースにあり、意味は皆「全部」だが、(S) の形だけは他と大きく異なっており、対応するものか、疑問である。

(Ek1) はロシア語より、(Ek2) は不明である。

(Hz) xiaok は風間 (1996b) で述べたようにアムール中流域言語圏 ((Hz)及び (Na)

クル・ウルミ方言、ビキン方言からなる）で共有している語である。(Na) siak「～まで」と同源かもしれない。C. にはいずれもあがっていない。ちなみにギリヤーク語でsuik/sikである。

(U) təu について、təumәňi は対格形である、したがって təu は語末に n を持つ。またShneider (1936) には tə(h)u「第二変化（n 終わり）」とあるので祖形は təsun か。C. によればこの təu と同源の語は (Na) に təxu「丸ごと」があるのみである。

(Oc) gaam と (Ut) gəəm はまず同源と考え、さらに (Ma), (Si), (J) の語形や (Na) xəm も同源の可能性を考えたいところだが、C. は (Oc) gaam と (Ma) ganǰi「全部」のみで一項目をたて、他方 (Ma), (J) のみの語形で一項目をたてている。C. によれば (Na) xəm と同源の語は (lit.Mo) xamtu「いっしょに」からで、I群には (Yak) から、II 群には III 群から入り、同じく (Na) の kamor「いっしょに」などと同源であるとみている。

この他に筆者の経験では、アムール下流の (Ul), (N) では čopal「全部」がきわめてよく使われる。これは C. によればほぼこの形で (N), (Ut), (Ul), (Oc) にあるという。語末に p があることから、(N), (Oc) のそれは III 群から入ったものと考えられる。ただ (Oc) にあるとしているものの、Avrorin i Levedeva (1978) にはなく、また風間 (1996a) のテキストでも gaam「全て」は 19 例（インフォーマントは三人にわたる）見いだされるが、čopal は一語もない。(Ut) では、池上 (1994) によれば北方言では čipaali が使われるようであり、池上 (1997) にも čipal/čuppal があがっている。なお C. はこの čopal を čop「すっかり（消える、なくなる）」と同源と考えていて、これは (Ek), (N), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na) にあり、(Ew) にもその派生語らしきものがある。

(Ma) wačixijamə について C. は、waǰi-「終える」という動詞からできたものとしておりこれと同源の動詞は (EK) od-、(Na) xoǰi- をはじめ (S), (N) 以外の全ツングースにある。

(82) [197]ねんれい（年齢）(age)

		(Hz) sa		(J) səə
(Ew) anŋanaŋan	(Ek1) nasun	(U) səə	(Na) ——	(Si) se
(S) nasun	(Ek2) baar	(Oc) ——	(Ut) anaňi	(Ma) səgə

(S) nasun は C. によれば、(lit.Mo) nasun より。
(Ek2) は C. によれば (S) のみにあり、(lit.Mo) baraGan「外見、姿」からである。
(Ut) は (59)「年」の (Ut) と同形、(Ew) は anŋan から派生した形となっている。

(U) をはじめとする語形はC. によれば (Oc), (U), (Ul), (Na), (Ma) にあり、アムール下流地域型の分布であって、(Ma) から広まったものと考えてよいのではないか。

(83) [199]おっと (夫) (husband)

		(Hz) ədi		(J) əigə
(Ew) ətikən-	(Ek1) ədirkəən	(U) mafa	(Na) əǰi	(Si) iixən
(S) ətəxən	(Ek2) ədii	(Oc) ədi/ada	(Ut) əǰi	(Ma) əigən

C. によれば (Ew), (S), (Ek1) と同源の形は、I 群の四つの言語で「男の老人、クマ」の意であり、それ以外の言語では (U) əkčə「はとこ」、(Na) əksən「父方の叔父」、(Ma) əskən「父方の叔父」がある。C. はさらに (lit.Mo) əčigə「父」を参考にあげているが、次にみる (84) (Ek1) adirkaan にみられるように、ツングース諸語では男性母音の語とセットになっていることを考えると対応するかどうか疑問である。

一方 (U) mafa と同源の語は、C. によれば逆に II III 群 (意味は「男の老人、クマ」) と (Ma) mafa「父より先代の人、祖先」にあって I 群にない。

(Oc) ada は次の (84)「妻」でもみるように、夫婦でお互いを呼び合うのに使える語である。C. にはその記載がない。

(Hz), (Oc), (Na), (Ut) にみられる語形と直接対応する語は C. によれば全ツングースにあるが、III 群と (Ek) では「父」の意のみ、(Ew), (N), (Oc)では「夫、雄」、(S) で「主人」である。

(Ma) əigən はC. によれば (Ma) と (J) のみである。

(84) [200]つま (妻) (wife)

		(Hz) azan		(J) sarigan
(Ew) atikan-	(Ek1) adirkaan	(U) mamasa	(Na) asi	(Si) sarəhən/xəxə
(S) ašee	(Ek2) adirkaan	(Oc) asa/ạda	(Ut) asi	(Ma) sargan/xəxə

C. によれば (Ew), (Ek1), (Ek2) にみられる語形は、I 群の四言語で「老婆」、(U) atiga で「女性、妻」、(Oc) ataŋa、(Ut) ati で「母の夫」、(Ma) atu で「雌 (の魚)」である。(Ut) にはさらに ataka「おばあさん」があがっている。ちなみに (Na) で ataka mamaňiは「蜘蛛」で、(Na) で mama は「おばあさん」であり、なぜここに mama が必要なのかわからない。C. によれば I II 群及び (Ut) では atakii その他の形で「蜘蛛」であり、別の項にあげているが、「老婆」を指す語と関係があるのではないかと考える。

C. によれば (U) mamasa と同源の語は II III 群で「おばあさん、妻」の意であり、(S) maama「敬意をこめた老人への呼びかけ」、(Ma) mama「祖母、おばあさん (敬語)」である。(S) 以外 I 群にはみられない点は、(83) (U) mafa「夫」と平行的である。

C. によれば (Oc) asa と同源の語は I III 群及び II 群の (Oc) では「女、妻」の意があり (ただし (Ul) では「妻」のみ), II 群の (U) a(h)antaでは「女」の意のみである。

(Ma) sargan をはじめとする IV 群の語は、C. でも (Ma), (J) のみであるとしている。

C. によれば (Ma) xəxə と同源の語は (S) で xəxə「妻」、(N), (Ul), (Na) で xəxə「ボタンの穴にあたる輪」となっているが、(S) は (Ma) から、(N) 以下の語は別の語源に由来するものではないか。

(85) [202]ちち (父) (father, papa)

		(Hz) amə		(J) amin
(Ew) amun	(Ek1) amin	(U) abuga	(Na) amaa	(Si) amə
(S) amin	(Ek2) amin	(Oc) ami	(Ut) ami-	(Ma) ama

(U) abuga については (53)「空」の項で触れた。親族名称に関しては言及形と呼びかけ形の別が問題となるが、調査での時間的制約などから、本稿であがっている形は両者がいり乱れている。親族名称に関しては風間 (1995) も参照されたい。

(86) [203]はは (母) (mother, mama)

		(Hz) əňiə		(J) əňijən
(Ew) əňin	(Ek1) əňin	(U) əňiŋə	(Na) əňəə	(Si) əňi
(S) əňəə	(Ek2) əňin	(Oc) əňə	(Ut) əňi-	(Ma) əňijə

(U) əňiŋə の -ŋə の要素は何だろうか。ただこれがあることによって abuga「父」と音節数の上でも対応する。

(87) [206]むすこ (息子) (son)

		(Hz) xitə		(J) ——
(Ew) ňarud	(Ek1) omolgi	(U) baatama sitə	(Na) xusə piktə	(Si) ǰii/hahəǰi
(S) ukkəəxən	(Ek2) xutə	(Oc) xitə	(Ut) xusə puttə-ňi	(Ma) ǰui/xaxa ǰui

(Ew) ňarud と同源の語は C. によれば、まず I 群の四つの言語では (Ek) ňirawii

をはじめ「若い男」の意であり、II III 群では nari, nai, ňii, ňiinta などの形で「人」の意 ((Oc), (U), (Ut) では「男」の意も), IV 群では (Ma) ňalma は「人」の意のみだが、(J) は「人、男」としている。

(S) ukkəəxən と同源の語は C. によれば、まず I 群では (Ek) xurkəəkəən、(Ew) xurkən でどちらも「未成年者、若者」で、(S) にもこの意があるとしている。他に (Ut) (purigə 他) 及び (Na) ビキン方言 (furi) で「若い」をあげている。

他方 C. は別項目のもとに「子供」の複数形 ((Ek) xuril, (Na) puril など、またここには (Na) ゴリン方言 puri/furi「家族」もあがっている) を扱っているが、これと上記の「若い」を意味する語は同源であろう。したがって「子供」の不規則な複数形は suppletionによって生じたものではないか。単数形の対応 (?) もさまざまな点で不規則である。

(Ek1) omolgi については風間 (1995) 参照。

(U) baatama sitə の baata は「少年」で、「男の子の方の子供」だが、baata について C. は (lit.Mo) bagatur「英雄、勇敢な」と比較している。「英雄、勇敢な」の意味ではいくつかのツングース語に入っているが、「少年」の意になっているのは (U) だけである。対応するかどうかについてもまだ検討が必要だろう。

(Ma) ǰui をはじめとする IV 群の語形は、C. によれば (Ma), (J) のみで、さらに漢語の「子 (zi^4)」を参考にあげている。

(88) [207]むすめ (娘) (daughter)

		(Hz) azan xitə		(J) ——
(Ew) xunaǰ	(Ek1) unaaǰi	(U) aǰigama sitə	(Na) əktə piktə	(Si) sahənǰi
(S) unaaǰi	(Ek2) xunaaǰi	(Oc) xitə/asam xitə	(Ut) əəktə puttə-ňi	(Ma) sargan ǰui

(Ew) xunaǰ をはじめとする語形についは風間 (1995) 参照。

(U) aǰigama xitə も aǰiga が「女の子」で、「女の子の方の子供」であるが、ここでも aǰiga が奇妙な語形である。C. は (Ek) asii「女」と比較しているが規則的な対応では説明できない。

(Ma) sargan と同源の語は C. によれば (Ma), (J) のみにある。

(89) [211]あに (兄) (elther brother)

		(Hz) agə		(J) axun
(Ew) ak-	(Ek1) akin	(U) agaa	(Na) daai agaa	(Si) agee
(S) axin	(Ek2) ak-	(Oc) akaa	(Ut) aaŋ-ňi	(Ma) agə

質問表のロシア語 starshij brat が「年上の方の兄」、mladshij brat が「若い方の兄」と解釈されたために上記の (Na) のような語形をインフォーマントが答えるものと思われる。(U) や (Oc) の調査の時にも同じようなことを経験したことがある。以下の (90), (91), (92) における (Na) の語形も同様である。

(90) [212]あね (姉) (elder sister)

		(Hz) gəgə		(J) əjun
(Ew) ək-	(Ek1) əkin	(U) əxəə	(Na) daai əgəə	(Si) gexee
(S) əxin	(Ek2) əki	(Oc) əkəə	(Ut) əigə-ňi	(Ma) gəgə

(Ma) gəgə と同源の語は C. によれば (Na) と (Ma) だけに見いだされるので、(Na) のそれは (Ma) より入ったものだろう。「兄」との語形の平行性からみても、(Ek1) əkin をはじめとする形の方が本来的なものであろう。gəgə が畳語形式であることは漢語からの影響を思わせるが、対応する語は漢語に見いだせない。逆に珍しく (Ma) より漢語に「格[4]格 (皇族の娘)」が入っている (C. による)。(Ma) gəgə の意味は羽田 (1937) によれば「父の兄弟に生まれたる女にして己より年長の者、親族の同輩中にあって自分より年長の女」となっている。

(91) [213]おとうと (弟) (younger brother)

		(Hz) nəo		(J) dəgun
(Ew) nəə-	(Ek1) nəkun	(U) nəŋu-	(Na) nuuči agaa	(Si) duu
(S) nəxun	(Ek2) nəkun	(Oc) nəŋu-	(Ut) nəu	(Ma) dəo

(Ma) dəo について C. は Ⅳ 群の他に、(S) (< (Mo)), (Na) (< (Ma) < (Mo)) にあるとし、(lit.Mo) degun より入ったものとしている。

(92) [214]いもうと (妹) (younger sister)

		(Hz) azan nəo		(J) ňijoxun
(Ew) nəə-	(Ek1) nəkun	(U) nəŋu-	(Na) nuuči əgəə	(Si) nun
(S) unaaji nəxun	(Ek2) nəkun	(Oc) nəŋu-	(Ut) nəu	(Ma) non

(93) [218]ともだち (友達) (friend, mate)

		(Hz) duxanak		(J) nəkur
(Ew) gia	(Ek1) girki	(U) anda	(Na) anda	(Si) guču
(S) axaa nəxun	(Ek2) druk	(Oc) anda	(Ut) andail	(Ma) guču

C. によれば (Ew) giaと同源の語は「別の、二つ目の、仲間」の意でⅠ群に共通してあり ((S) は「別の」の意のみ)、(U) geæ「別の」、(Na) giagda、(Ul) geegda(n) (共に「未婚の」) もあげている。さらにⅢ群の三言語及び (Oc) の「櫂」((Na) giol など) も比較しているがこれはどうか。Onenko (1980) によれば (Na) giol「片側だけに水かきのついたオール」とあるので、意味的なつながりはいちおうある。

(S) axaa nəxun は (Mo) で ax·düü「兄弟、同胞」(小沢 1983) というので、これよりの飜訳借用と考えられる。

(Ek1) girki と同源の語はC. によればⅠ群の四つの言語と (Na) girki にあるが、語中 -rk- があるので (Na) のそれは (Ek) からの借用によるものだろう。(S) 以外のⅠ群では「仲間、助手」、(Ek), (Ew) ではさらに「妻」の意で、(S) では「妻をめとる」の句で用いられ、(Na) girki は「頭の尖った人間、もしくは獣の形をした神像、シャーマンを助ける聖霊」の意であるという。

(Ek2) はロシア語 (drug) より。(Hz) duxanak は不明である。

(U) anda をはじめとする諸形はC. によれば (Ew), (S) を除く全ツングースにandaの語形であり、(lit.Mo) anda「仲間」から入ったものとみている。たしかにⅠⅡ群で -n- < *-nd- の変化が起きた後に借用されたものと考えることができる。(Ut) andail について池上 (1997) は「一人でも使う」とし、C. はこれを複数形とし、単数形はandaとしている。

(Ma) guču と同源の語はC. によれば (S) gusu「仲間」、(Oc) gočo「叔父」、(Ul) goču「父方の親類」、(Na) gučəkə「母の弟」、(J) guču「護衛」がある。

(J) nəkur と同源の語はC. によれば (Ma) nəku「女同士の友達」のみで、(lit.Mo) nökür「夫、親友、同志、仲間」を参考にあげている。

(94) [224]おとこ (男) (male)

		(Hz) xax ňio		(J) xaxai
(Ew) bəj	(Ek1) ňirabii bəjə	(U) ňiinta	(Na) xusə	(Si) hahə
(S) ňirug bəj	(Ek2) bəjə	(Oc) xusə	(Ut) nari/xusə	(Ma) xaxa

(S), (Ek1) の語形については (87)「息子」を参照。

(Na) xusə と同源の語はC. によれば (Ek) (isəgdin), (Ew), (N) の三つのⅠ群の言語では「(民話の中で) 猟師」であり、(U) でもやはり民話中の登場人物である「若い男」で、Ⅲ群の三つの言語ではxusə「男」である。(Oc) xusə は (Ul) よりとしているが、Ⅲ群と同形で語頭 x- を残しているので借用であることは間違いない。

(Ma) xaxa をはじめとするⅣ群の語形は、C. によればさらに (Oc)「英雄の名」、

(Ut), (Na)「勇ましい」に広がっているという.

(95) [225]おんな (女) (female)

		(Hz) azan ňio		(J) xəxəə ňijarma
(Ew) asi	(Ek1) asii bəj	(U) aanta	(Na) əktə	(Si) xexə
(S) ašee bəj	(Ek2) axii	(Oc) asa	(Ut) əəktə	(Ma) xəxə

(U) aanta は Shneider (1936) に a(h)anta とあるように、*asa-nta から変化したもので、ňii-nta と対立している. (Na) əktə をはじめとする III 群にみられる語形を、C. は (Ek) əkiin「姉」と比較しているがなお検討の余地があろう. əktə/əəktə「女」はC. によってみてもやはり III 群に固有の語形である.

(Ma) xəxə は (84)「妻」項参照.

(96) [226]ひと (人) (person, man, one)

		(Hz) ňio		(J) —
(Ew) bəj	(Ek1) bəjə	(U) ňii	(Na) nai	(Si) nanə
(S) bəj	(Ek2) bəjə	(Oc) ňææ	(Ut) nari	(Ma) ňijalma

(16)「体」、(87)「息子」参照.

(97) [227]わたし (私) (I)

		(Hz) bi		(J) miňi (gen.)
(Ew) bii	(Ek1) bii	(U) bii	(Na) mii	(Si) bii
(S) bii	(Ek2) bii	(Oc) bii	(Ut) bii	(Ma) bi

(98) [228]あなた (you)

		(Hz) si		(J) —
(Ew) xii	(Ek1) sii	(U) sii	(Na) sii	(Si) šii
(S) šii	(Ek2) sii	(Oc) sii	(Ut) sii	(Ma) si

(99) [229]かれ (彼) (he)

(100) [230]かのじょ (彼女) (she)

		(Hz) ňiaňi			(J) —
(Ew) noŋɯn	(Ek1) nugan	(U) nuaňi/uti	ňii	(Na) ňoaňi	(Si) ii/terə
(S) tari	(Ek2) tawar	(Oc) —		(Ut) nooňi	(Ma) i

(Ew) noŋɯn と同源の語は、C. によれば IV 群以外の全ツングースにある（ただし (S) は斜格形のみあがっている、Poppe (1931), 胡・朝克 (1986) は共に (S) には三人称の代名詞専用の語はないとしている)。

(Ma) i と同源の語についてはC. は、(Ma), (J) の他に (S) iñi「彼の」があるとしている。

(101) [237]だれ（誰) (who)

		(Hz) ňi		(J) ——
(Ew) ŋii	(Ek1) ňii	(U) ŋii	(Na) ui	(Si) vee
(S) awu	(Ek2) ŋii	(Oc) ňii	(Ut) ŋui	(Ma) wə

(S) awu は C. によれば aɣuu であり、(Ek) abguu (*xabagu)「どれ、どんな」や (Na) xai「何」などと対応する語であるという。

(S) 以外の語形は互いに対応するものと考えられる。池上 (1989) は祖形に *ŋui (あるいは *ŋəi) をたてている。

(102) [239]なまえ（名前) (name)

		(Hz) gərbi		(J) ——
(Ew) gərbɯ	(Ek1) gərbii	(U) gəgbi	(Na) gərbu	(Si) gevə
(S) gəbbii	(Ek2) gərbi	(Oc) gəbbi	(Ut) gəlbu	(Ma) gəbu

(103) [240]じ（字) (letter)

		(Hz) bitxə		(J) ——
(Ew) ——	(Ek1) bičig	(U) ——	(Na) ——	(Si) xerəxən
(S) bitəg	(Ek2) dukiwun	(Oc) ——	(Ut) bičixə	(Ma) xərgən

(Ek2) dukiwun と同源の語は C. によれば I 群のみで、(Ek), (Ew), (N) にあり、(Ek) dukuu-「書く」、dukiwun「手紙」などとなっている。

(Ma) xərgən はC. によれば (Ma) にしかない。

(S) bitəg と同源の語はC. によれば (Ew) と (U) を除く全ツングースにあり、どの言語でもまず「手紙」の意を持っている。さらにC. は (lit.Mo) bičig (<チュルク諸語) を参考にあげている。

(104) [241]こえ (声) (voice)

		(Hz) dilgan		(J) ——
(Ew) dilgan	(Ek1) dilgan	(U) kəjə	(Na) ǰilgan	(Si) ǰiləhan
(S) diggan	(Ek2) guulaji	(Oc) biggə	(Ut) ǰilda	(Ma) ǰilgan

(Ek2) はロシア (golos) より. (U) kələ は (106)「ことば」で後述する.

(Oc) biggə は C. によれば「喉」の意で (U) 以外の全ツングースにある.

Avrorin i Levedeva (1978) には (Oc) digga(n)「声、言葉」があがっている.

C. によれば (S) dilgan と同源の語は (U) 以外の全ツングースにあり意味も「声」である. ただし C. は (U) diɣan-「言う」を (S) dilgan と同源の語と考えている.

(105) [242]おと (音) (sound)

		(Hz) dilgan		(J) ——
(Ew) iig	(Ek1) ajalgu	(U) ug/jaida-	(Na) siasin	(Si) iasəki/mədan
(S) dilgan	(Ek2) igdi-i	(Oc) ——	(Ut) seesiñi	(Ma) asuki/mudan

C. によれば上記の (Ew) iig、(Ek2) igdi-i、(U) ug と同源の語は (Ek), (Ew), (N) で ii-「音がする」、iig「音」((Ek) にはさらに igdi-「とどろく」も), (U) で igdi「声」、uga「音」、(Ul), (Ut) で ujsi-「音がする」、(Na) で xujsi-「音がする」である.

ただし (U) ug は (lit.Mo) üge-n「語、単語、言葉」(小沢 1983) からの可能性もあるのではないか.

(Ek2) ajalgu は (Mo) より (津曲 1992、(lit.Mo) ajalGu「方言、小方言、発音、イントネーション、高誦」(小沢 1983)) である.

(U) jaida-は「騒ぐ、ざわめく」の意の動詞で、Shneider (1936) は ja(h)ida- とし、ja(h)i「騒音」もあげているが、C. によれば (U) にしかない.

(Na) siasin、(Ut) seesiñi と同源の語は C. によれば (N) (xeesixin) と III 群の三つの言語にあって「音」の意だが、(N) は (Ul) から入ったものではないだろうか.

(Ma) asuki と同源の語は C. によれば (Ek), (Ew), (Ul), (Ut), (Na), (Ma) にあるが、I 群では「きしむ、ぜーぜー言う」、III 群では「カサカサいう音」などの意である.

(Ma) mudan は「音、調子、曲がり道」(羽田 1937), (Si) iasəki は「音楽、曲の音」(山本 1969) の意である. C. によれば (Ek), (U), (Ut), (Na), (Ma) にあり、共通して「川の急カーブ」の意を持っている. (Oc), (Ul), (Na) では「～回」の意があるが、これは別の語に由来する可能性もあるのではないか. また (Oc) へは III 群から入ったものだろう.

(106) [243]ことば (言葉) (language, speech)

		(Hz) gisun		(J) xərsəbə (acc.)
(Ew) təərən	(Ek1) inňi	(U) kəjə	(Na) xəsə	(Si) gisun
(S) —	(Ek2) tuurən	(Oc) —	(Ut) kəsə	(Ma) gisun

(Ew) təərən、(Ek2) tuurən と同源の語は C. によれば I 群の三つの言語 ((Ek), (Ew), (N)) に動詞「話す」((Ek) tuuurən-/turəən-) とともにあり、さらに (Oc) turpin「口承文芸としての話」がある。(Oc) の語形にはrがあるので、借用と考えられる。

(S) では別のインフォーマントから (S) ugə が得られたが、これは (lit.Mo) üge-n「語、単語、言葉」(小沢 1983) より。

(Ek1) inňi と同源の語は C. によれば「舌」の意で全ツングースにあるが、ロシア語やモンゴル語とは違って、どの言語にも「ことば」の意味はないようだ。調査の時にはこの点も確認し、sii oondi inňijə saandi.「おまえはどんなことばを知っているか。」という文も採集できた (津曲 1992)。このインフォーマントがモンゴル語を自由に操ることから、モンゴル語からの翻訳借用の可能性があるのではないかと考える。

上記の (U), (Na), (Ut) にみられる語形は、C. によれば (N), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na) に「ことば」の意味であり、(S) に「法令」、(Ma) に「勅旨、法令」の意である。(S) はおそらく (Ma) から入ったものであろう。

(Hz) gisun と同源の語は C. によれば (Ma) gisun「話」、gisurə-「話す」の他に (Na) gisurə-「話す」があるが、これは (Ma) から入ったものではないか。C. はさらに (Ek) gis「タイコのばち」をはじめとする同様の意味の語を (S), (Ew), (N), (Oc), (Ul), (Ut), (Na) にわたって比較しているが、意味があまりにも違うので、さらに慎重であるべきではないか。

C. によれば (J) xərsəbə と同源の語は (Ek) (əərii-), (S), (Ew), (N), (Ul), (Ut), (Na) (xəərsi-) があり、意味はいずれも「呼ぶ」、及び「叫ぶ ((Ek), (N), (Ut))」、などである。

(107) [244]こころ (心) (mind, heart)

		(Hz) —		(J) əriŋə
(Ew) xusə	(Ek1) miigan	(U) miawa/xaňa	(Na) doo-	(Si) Goňin
(S) —	(Ek2) meewan	(Oc) məjə	(Ut) mərə	(Ma) gūňin

(Ew) xusə と対応する語は C. によれば他の言語にないが、Novikova (1980) によればその意味は「きっかけ、理由、原因」である。

(U) xaňa と同源の語はC. によれば (S) を除く全ツングースにあるが、(U) と (Ma) には「心」の意で、他は「影、心」の意であがっている。筆者もやはり (Oc) で「影」を採った時に「魂」の意があることをインフォーマントより指摘されたことがある (風間 1996b)。

(Ek1) miigan をはじめとする語は、C. によれば「心臓 (serdtse)」の意で全ツングースにあるが、どの言語にも「心」の意味は明記されていない (ロシア語の serdtseには「心」の意味もあるが、この C. の項目では「心臓」の意味だけであろう)。AA 研 (1967) のこの項目のロシア語は serdtse となっているから、インフォーマントがそれに引きずられた可能性もある。

(Oc) məjəと同源の語についてC. は、(Ek), (Ew), (N), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na), (Ma) にあるとし、「考える、気づく、思いつく」((Ek) mərgə-、(Oc) məiči-、(Na) məxə-、(Ma) mərki- など) のような意味の動詞からの派生語と考えている。

(Na) doo- は「内、心の中」などの意の語で、「気分が悪い、気を悪くする」などの意味の句で使われる語である。C. によれば全ツングースにあるが、「心」の意が明記されているのは (Oc), (Ul), (Na) だけである。

(Ut) məjə と同源の語はC. によれば基本的にIII群に分布し、(Na) を例にあげるならば murun「心」、murči-「考える」である。他に (Ew) murač「気力、幸運」、(Oc) muiči-「考える」があるとしているが、Avrorin i Levedeva (1978) には (Oc) məiči-「考える」はあってもmuiči- はない。

(Ma) gūnin について羽田 (1937) は「意、意志、意向」の意としている。C. は (Ek) guun-、(Na) un- をはじめとして全ツングースにある「言う、語る」などの意の動詞と同源であるとみており、(Ma) にはguňi-「考える」があるとしている。

(J) əriŋə と同源の語はC. によれば全ツングースにあり、「息、命」((Ek) əriiksə, (Na) ərgən) などの意であって、(Ek), (N), (Oc), (U) には「心」の意も記されている。

(108) [245]かみ (神) (God)

		(Hz) ənduri		(J) fijur
(Ew) xəwki	(Ek1) burkan	(U) ənduri/bua	(Na) əndur	(Si) enduri/fečixi/fučixi
(S) bokkon	(Ek2) burkan	(Oc) ənduri	(Ut) əǰəxə	(Ma) ənduri/fučixi /ənduri/xaddau

(Ew) xəwki 同源の語について、C. は (Ma), (J) を除く全ツングースにあるとしている。I群の四つの言語では「神」の意があり、また同源の語に「偶像」の意があり、(Ek), (N) には「シャーマンを助ける聖霊」の意味がある。II群では (Oc) səwəən「聖霊」、

səwəki「木像」、(U) səwən「聖霊」、səwəxi「木像」であり、Ⅲ群では (Na) səwəən などの形で「木像」と、「(その中に宿る) シャーマンを助ける聖霊」の両方の意味を示すという。

(Ek1) burkan と同源の語は C. によれば (Ek), (S), (Oc), (Na) にあり、(Ek), (S) は (lit.Mo) burxan からの借用とみている。そこにあがっている (Oc) bərxə bəəkiñi「神の葉」、(Na) burkian「神の名」も、(Oc) が -r-、(Na) が -rk- を持っていることからみて、どちらも最近借用したものと考えられる。

(Hz) ənduri をはじめとする同言語について C. は (S), (N), (Oc), (Ul), (Na), (Ma) にあるとしており、また池上 (1997) より (Ut) にもあることがわかるが、これはアムール下流域型の分布であるといえる。C. は (N) < (Ul) < (Ma), (Ul) < (Ma), (Na) < (Ma) という借用が行われたとみている。(N), (Oc) ともその語形は ənduri で、-r- や -nd- があることをみても最近借用された語であることは間違いない。(Ma) より下流に広がった語と考えて問題ないだろう。

(Ut) əǰəxə の意は池上 (1997) によれば「目に見えない偶像などにつく神」であるという。C. によればこれと同源の語は (N), (Oc), (Ul), (Ut) にあり、「狩人の保護者の霊 (もしくはその人型の偶像)」であるという。(Na) にも əǰəxə の語はあり、「狩りの成功のため首にかける金属もしくは木のお守り」(Onenko 1980) である (風間 1993、p. 180, p. 210, 211も参照)。(Ut) では i の前以外では ǰ は d に変化したと考えられるので、(Ut) əǰəxə は借用されたものと考えられる。

(Ut) xaddau「創造神」(池上 1997) と同源の語を、C. は (Oc) xadau「創造神」しかあげていないが、(Na), (Ul) にもあるようだ (これについては荻原 1996 p. 157-69に詳しい)。

(Si) fečixi/fučixi は「諸仏、仏教の神」であり、(Si) enduri は「氏神、かまどの神」である (山本 1969) という。羽田 (1937) によれば (Ma) では fučixi「仏、菩薩」、ənduri「神」である。C. は (Ma) fučixi を漢語「佛 (fo^2)」からの借用としているが、(Ma) で f- < *p-、-č- < *-rk- という変化があったことを考えれば、先述の (lit.Mo) burxan からの可能性も考えられるのではないだろうか。

(J) fiǰur は C. になく、不明である。

(109) [249]これ (this one)

		(Hz) əi		(J) əsə
(Ew) ərək	(Ek1) əri	(U) uti	(Na) əi	(Si) erə
(S) əri	(Ek2) ər	(Oc) ——	(Ut) əri	(Ma) ərə

(U) uti と同源の語について C. は、(Ma) uba「ここ」、utala「これだけ」、uttu「このように」のみをあげている。

一方 (U) にも əji「この」(Shneider 1936) がある (筆者も他のインフォーマントより確認した)。

(Ew) ərək の -k は主格を示す要素と考えられており (Novikova 1968)、普通名詞、代名詞を問わず主格は無語尾であるツングース諸語さらにはアルタイ諸言語全般にあって、珍しい存在である。

(110) [250]それ (111) [251]あれ (it, that one)

		(Hz) ti		(J) —
(Ew) tarak	(Ek1) tari	(U) —	(Na) təi	(Si) terə/teerə
(S) tari	(Ek2) tər	(Oc) —	(Ut) tari/taatari	(Ma) tərə

(112) [252]どれ (which one)

		(Hz) ja		(J) —
(Ew) jaak	(Ek1) awguun	(U) jəuxə/jauxi	(Na) xawoi	(Si) jaaemə/jaamə
(S) ijjəə	(Ek2) iir	(Oc) jawa	(Ut) xaawu	(Ma) —

代名詞についても池上 (1989) に詳しい考察があり、そこで指摘されているが、「何」を意味する語には二系列あって、一つは主にⅠⅡ群で使われる jaa などの語形、もう一つは主にⅢ群で使われる xai などの語形である。Ⅳ群の (Ma) では両方の系列の語が用いられる。

「どれ」など「何」からの派生などに基づく語にも基本的に同様の分布が観察される。ただしここでの (Ek1) awguun は xai 系列のものと考えられる。

(113) [253]なに (何) (what)

		(Hz) xajə		(J) —
(Ew) jaak	(Ek1) ikun	(U) jəu	(Na) xai	(Si) ai
(S) uxuŋ	(Ek2) eekun	(Oc) jəu(xə) kəə	(Ut) xai	(Ma) ai

(S) uxuŋ は C. にないが、ixuŋ からの逆行同化によって生じたものだろう。

(114) [254]なぜ (why)

		(Hz) —		(J) —
(Ew) jaami	(Ek1) idaa	(U) jədu/jəəmi	(Na) xagoi	(Si) anə/ianə

(S) ittuu	(Ek2) eeda	(Oc) jaanami	(Ut) xaimi	(Ma) ainu

(Na) xagoi は「何のために」の意であって、xaimi「どうして」もよく使われる。

(115) [257]ここ (here)

		(Hz) əi ba		(J) —
(Ew) ələ	(Ek1) əduu	(U) olo/odu	(Na) əidu	(Si) evaa
(S) əduu	(Ek2) əduu	(Oc) əədu	(Ut) jədu	(Ma) uba

(116) [258]そこ (117) [259]あそこ (there, that place, over there)

		(Hz) ti ba		(J) —
(Ew) —	(Ek1) talaa	(U) talaa/tadu	(Na) tado	(Si) tevaa/teerəvaa
(S) talaa	(Ek2) təələ	(Oc) tala	(Ut) čadu/taatadu	(Ma) tuba

(118) [260]どこ (where, anywhere)

		(Hz) —		(J) —
(Ew) ilə	(Ek1) iləə	(U) jələ	(Na) xaido	(Si) iavidə
(S) iləə	(Ek2) iidu	(Oc) idu	(Ut) xaidu	(Ma) aibidə

(119) [266]ひだり (左) (left)

		(Hz) xazuta		(J) ǰo
(Ew) ǰəgənti	(Ek1) zəgin	(U) ǰəəŋəǰə	(Na) ǰəungiə	(Si) hasəhuu
(S) ǰəəŋguu	(Ek2) ǰəgin	(Oc) ǰæænti	(Ut) dəunǰee	(Ma) xasxū

(Hz) xazuta と同源の語は (Na) のクル・ウルミ方言、ビキン方言にもあって、アムール中流域言語圏に分布している。(J) ǰo について C. は漢語「左 (zuo^3)」を参考にあげている。

他の諸形は互いに対応するものと考えられる。C. は (lit.Mo) ǰegün「左、東」を参考にあげている。

(120) [267]みぎ (右) (right)

		(Hz) jočokta		(J) ǰəgun
(Ew) aangida	(Ek1) zuptuuki	(U) aaŋaǰaa	(Na) aangia	(Si) ičii
(S) baruuŋguu	(Ek2) aan	(Oc) aanti	(Ut) aanǰee	(Ma) iči

(S) baruuŋguuは(Mo) baruun「西の、右の」よりの借用である。

(Ma) ičiと同源の語はC. によれば(Na) クル・ウルミ方言ista「右」、(Na) ビキン方言 isikta/isixta「右」のみで、上記の (Hz) jočokta とあわせてアムール中流域型の分布を示している。(Ek1) zuptuuki については、C. に (Ek) ǰupkəəki「十分な、正確な、ちょうど」があり、(lit.Mo) ǰöb「正しい、正確な」を参考にあげている。小沢 (1983) によれば「右」の意も確かにある。

(121) [268]まえ (前) (front)

		(Hz) ǰuləzgə		(J) ǰulee
(Ew) ǰuuldə	(Ek1) zuləəskii	(U) ǰuləxi	(Na) ǰuliələ	(Si) ǰuləxə/ǰuluxu
(S) ǰuldəətə	(Ek2) ǰulguu	(Oc) ňauki/ǰuləxi	(Ut) dullee	(Ma) ——

(Oc) ňauki と同源の語は C. によれば (Ek) ňaawdə「前へ」、(Ew) ňawla-「動く」、(Ut) nawra-「前を行く、先導する」がある。

(122) [269]うしろ (後) (back)

		(Hz) amizgə		(J) amurgai
(Ew) amarda	(Ek1) amaskii	(U) amiaňi/amaixi	(Na) xamiala	(Si) amərixi
(S) amidaata	(Ek2) amalguu	(Oc) amaasi/amaxi	(Ut) xamarree	(Ma) amargi

(123) [270]うち (内) (inside, inward, interior)

		(Hz) doški		(J) dolo
(Ew) doo-n	(Ek1) doolaa-n	(U) dolo	(Na) doola	(Si) dolə/dolu
(S) dooloo	(Ek2) dooguu	(Oc) doo/doolo	(Ut) doo	(Ma) dolo

(124) [271]そと (外) (out, outside, exterior)

		(Hz) tuləški		(J) tulilə
(Ew) baad	(Ek1) tuliiguu	(U) buala	(Na) boala	(Si) tiulixi
(S) tuldəə	(Ek2) tulguu	(Oc) buala	(Ut) bookkee	(Ma) tulərgi

(Ew) を除くI群とIV群、及び (Hz) の諸形と同源の語はC. によれば、II群にはなく、III群では (Ul) tuli、(Ut) tuliə(n), (Na) tuliə で意味はいずれも「中庭、家の外の空き地」に限られている。派生語も記されていない。池上 (1997) によれば (Ut) tullee「外」である。

他方で I 群と IV 群、特に (Ew), (Ek), (Ma) では様々な格をとった形や派生形が広く用いられるようである.

(125) [273]うえ (上) (up)

		(Hz) uški		(J) wəši
(Ew) ojda	(Ek1) ugiiguu	(U) uilə/uixi	(Na) ujələ	(Si) nuŋuu/ňiuŋuu
(S) oroondə	(Ek2) ujiləə	(Oc) uilə	(Ut) uwwee	(Ma) ňiŋu/ňiŋudə

(Ew) ojda と同源の語について C. は全ツングースにあるとしているが、「表面」がその中心的な意味と考えられ、「(物のそれに接触した) 上、上部」の意味も (Ek) などに記されている.

(S) oroondə は (lit.Mo) orui「頂上、頂点」から入ったものだろうか.

(Ma) の語形は C. によれば (Ma) にしかないようだ.

他の諸形は互いに対応するものと考えられ、C. によればさらに (Ew) に əj「上」、(Ma) に wəsixun「上、上に、高く、東、東に」がある. これと同源の語で「東」の意が明記されているのは (Ma) だけなので、注目されるが、チュルク系の言語で「上」を意味する語にやはり「東」の意があるという. 今後検討したい.

(126) [274]した (下) (down)

		(Hz) xərgizgə		(J) fuǰilə
(Ew) xərgə	(Ek1) ňiiguu	(U) xəgiə/xəgilə	(Na) pəgiələ	(Si) feǰərxi
(S) əggiiləə	(Ek2) xərgiiləə	(Oc) xəgilə	(Ut) pəisəi	(Ma) fəǰərgi

(Ek1) ňiiguu は C. にもなく不明である. (以上)

参考文献

池上 二良 1987「アムール川下流地方と松花江地方 —「満州」の語源にふれて —」『東方学会創立四十周年記念東方学論集』東京.

_____ 1989「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻 東京, 三省堂, 1058-83.

_____ 1994「ウイルタ語の北方言と南方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第3号 網走, 北海道立北方民族博物館.

_____編 1997『ウイルタ語辞典』札幌, 北海道大学図書刊行会.

小沢 重男 1983『現代モンゴル語辞典』東京, 大学書林.
荻原 真子 1996『北方諸民族の世界観』東京, 草風館.
風間伸次郎 1991「ナーナイ語テキスト」『ツングース言語文化論集 1』黒田信一郎 津曲敏郎編, 文部省科学研究費補助金 (国際学術研究：63041002) 研究成果報告書 (2), 札幌, 北海道大学文学部.
_____ 1993『ナーナイ語テキスト』ツングース言語文化論集 4, 小樽商科大学言語センター.
_____ 1995「ナーナイ語の親族名称について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第4号 網走, 北海道立北方民族博物館.
_____ 1996a「ヘジェン語の系統的位置について」『言語研究』109, 117-39, 東京, 日本言語学会.
_____ 1996b『オロチ語基礎資料』ツングース言語文化論集 7 鳥取大学教育学部.
倉石武四郎 1985『岩波中国語辞典』東京, 岩波書店.
津曲 敏郎 1989「女真語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻 東京, 三省堂, 251-2.
_____ 1992「満州語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻 東京, 三省堂, 203-5.
_____ 1997「エウェンキー語オルグヤ方言についての覚え書き」『小樽商科大学人文研究』93, 小樽, 小樽商科大学.
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) 1966, 1967『アジア・アフリカ言語調査票』上 (1966), 下 (1967) 東京.
羽田 亨編著 1937『満和辞典』京都.
山本 謙吾著 アジア・アフリカ言語文化研究所編 1969『満州語口語基礎語彙集』東京, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
安俊 1986『赫哲語簡志』北京, 民族出版社.
胡増益・朝克 1986『鄂温克語簡志』北京, 民族出版社.
Angina, S. V. 1993 *Russko-ul'chskij razgovornik*. Bogorodskoe.
Avrorin, V. A. i E. P. Lebedeva 1978 *Orochskie teksty i slovar'*. Leningrad, Nauka.
Boldyrev B. V. 1994 *Russko-Ewenkijskij slovar'*. Novosivirsk, Nauka.
Cincius et al. 1975, 1977 *Sravnitel'nyj slovar' Tunguso-man'chzhurskix jazykov, Materialy k etimologicheskomu slovarju, tom 1, tom 2*. Leningrad, Nauka.
Cincius V. I. 1982 *Negidal'skij jazyk*. Leningrad, Nauka.

Cincius, V. I. i L. D. Rishes 1952 *Russko-ewenskij slovar'*. Moskva, Gosdarstvennoe izdatel'stvo inostrannyx slovarej.

Ikegami, J. 1974 Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Välker.* Berlin, Akademie-Verlag, 271-2.

Kiyose, G. N. 1977 *A Study of the Jurchen Language and Script.* Kyoto Hooritubunka-sha

Kolesnikova, V. L. i O. A. Konstantinova 1960 Russko-ewenkijskij slovar'. Leningrad, Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo ministerstva prosvesshenija RSFSR.

Novikova, K. A. 1968 Ewenskij jazyk. *Jazyki narodov SSSR 5.* Leningrad, AN SSSR.

_____ 1980 *Ocherki dialektov evenskogo jazyka (tom 2).* Leningrad, AN SSSR.

Onenko, S. N. 1980 *Nanajsko-Russkij slovar'*. Moskva, Izd. Russkij jazyk.

_____ 1986 *Russko-nanajskij slovar'*. Moskva, Russkij jazyk.

Petrova, T. I. 1936 *Ul'chskij dialekt Nanajskogo jazyka.* Moskva/Leningrad, Uchpedgiz.

Poppe, N. N. 1931 *Materialy po solonskomu jazyku.* Leningrad, AN SSSR.

Schmidt, P. 1923 The language of the Olchas. *Acta Universitatis Latviensis* 8, Riga.

Shneider, E. P. 1936 *Kratkij Udejsko-Russij slovar'*. Moskva/Leningrad, Uchpedgiz.

Sunik, O. P. 1985 *Ul'chskij jazyk.* Leningrad, AN SSSR.

Tsumagari, T. 1992 A basic vocabulary of Khamnigan and Oluguya Ewenki in northern Inner Mongolia 「北方文化研究」 21, 札幌, 北海道大学文学部.

Vasilevich, G. M. 1958 *Evenkijsko-Russkij slovar'*. Moskva, Gos. Izd. inoctr. i nac. slovarej.

Zhang, Yanchang, Zhang Xi & Dai Shuyan 1989 *The Hezhen language.* Jilin Changchun, University Press.

ISSN 1226-6582

알 타 이 학 보

제 7 호 1997년 12월

목 차

On Some Popular Medical Herb Names
of the Sibe People ..... Giovanni STARY... 1
ツングース諸語における基礎語彙A (名詞編) ..... 風間伸次郎... 11
할하 몽골어의 xapax '보다'와 үзэх '보다' ..... 유원수... 63
18세기 칼묵어 자료의 어휘적 검토 ..... 최형원... 95
契丹語數詞及契丹小字拼讀法 ..... 淸格爾泰...143
거란어와 몽골어의 十二支 ..... Chinggeltei...153
Kügü~kügüy '이모(姨母)'에 대하여 ..... 이용성...161
초기 한반도와 중앙아시아 관계에 대한
역사비교언어학적 조명 ..... 최한우...171
자음교체와 음운화 ..... 정도상...195
휘 보 221

한 국 알 타 이 학 회

ALTAI HAKPO

JOURNAL OF THE ALTAIC SOCIETY OF KOREA

No. 7 December 1997

CONTENTS

On Some Popular Medical Herb Names
of the Sibe People ..... Giovanni STARY... 1
The Basic Vocabulary of Tungus Languages (A) ..... Shinjiro KAZAMA... 11
The Verbs *xapax* 'to see' and *ɣɜɜx* 'to see'
in Khalkha Mongolian ..... Won-soo YU... 63
A Lexical Study of Kalmuck Material
in Eighteenth Century ..... Hyong-won CHOI... 95
The Khitan Numeral and the Pronunciation
of Khitan Small Scripts ..... Chinggeltei...143
The Twelve Horary Signs(十二支) of Kitan and Mongolian .... Chinggeltei...153
On the Word Kügü~kügüy 'Maternal aunt' ..... Yong-sŏng LI...161
A Study on the Relation of Korea and Central Asia
in the Early Stages — Historical and Comparative
Linguistic Perspective ..... Han-woo CHOI...171
Consonant Alternation and Phonologization ..... To-sang CHUNG...195
Miscellanea 221

Published by
THE ALTAIC SOCIETY OF KOREA
Address: c/o Department of Linguistics
Seoul National University
SEOUL 151-742, KOREA